A.6.8.0.
E33

祕

昭和十四年七月

ヒトラー總統著

マイン・カムプの外交篇

外務省情報部

情
124
外交

外務省
32.2.2
圖書室
E33-14

調一0113

0005

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

緒言

ヒトラー總統著マイン・カムプは二卷より成り、第一卷は「生ひ立ちの記」からナチス黨の結成まで十二章、又專らナチス運動を取扱つた第二卷は十五章で兩卷併せて二十七章七百八十餘頁の大冊である。本輯に集錄せる第一章の「ミュンヘンの卷」は第一卷第四章の「ミュンヘン」をとり、第二章の「ドイツの對露政策」第三章の「新三國同盟論」第四章の「ドイツとフランス」は第二卷の第十三章「戰後の同盟政策」第十四章の「ドイツの東進政策」及第十五章の「權利としての正當防衛」を譯せるものである。

「ミュンヘンの卷」は戰前のドイツ外交を批判せるものであり、「ドイツの對露政策」以下の三篇は戰後にとるべきドイツの外交方針を示したもので、何れもドイツの東進政策に終始してゐる。

マイン・カムプの原本にはもと「外交篇」などといふ特別な篇は存しない（小見出も便宜挿入）。今假にこの名稱を用ゐた所以のものは、本輯のマイン・カムプのうち外交に關係ある章だけをここに集めたからである。

本輯の論文は何れも嘗て一度「國際事情」に出たものである。「國際事情」は一般に公開されるものであるから、公開して面白くないと思ふところは削除して置いた箇所もある。例へば本輯「新

外務省
情報部
124
41. 9. -7

調一0113

0006

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三國同盟論」中、

「米は無盡藏の富を有する新興の強國であるから、之をやつつけるのはドイツをやつたやうに手輕には行かぬ。若し一朝兩國の間に戰端が開けたら、英單獨では相手になれない。ロンドン當局が最後迄日英同盟に未練を持つて居たのはこの爲であつた。云々」

とあるところは、少しく譯文に手加減を加へたものであつて、原文には時局柄世人の眼に觸れさせない方が良いと思はれる二三の句が挿入されて居たから、それは削つた。正直に譯すと次のやうになるのである。

「米は無盡藏の富源を擁する新興の強國であるから、之をやつつけるのはドイツをやつたやうに手輕には行かぬ。他日英米の間にも雌雄の決せらるる時が來たら、英國だけでは勝味があるまい。日英同盟は人種的に考へたら恐らくは無責任なものでもあらう。さりながら、勢の盛んな米國を相手として戰ふにはこの他に英としては方法がない。英國が黃色い拳をつかんで、日本との同盟に名殘を惜んだのはこの爲であつた。」

最後に第一章「ミュンヘンの卷」にはヒトラー總統が日露戰爭を論じてゐるところがある。總統は日露戰爭は寧ろ獨露戰爭であるべきであつたと說き左の如く論じて居る。

「ドイツは英と提携するか、或はこれを敵とするかの分岐點に立つて居たのである。而も提携は

寧ろロンドン側から仕かけられた。

時期は恰も十九世紀の終末から二十世紀へかけての時であり、具體的に云へば日英同盟の締結直前である。ロンドンはしきりにベルリンへモーションをかけたものである。然るにベルリンでは英國の秋波を危險な誘惑なりとした。英國の誘に乘ることは他人の爲に火中の栗を拾ふことだとして英國の誘を避けた。同盟は『與へて貰ふ』ものであり、『貰つて與へる』ものだ。與へるだけの同盟もなければ、貰ふばかりの同盟もない。英國から同盟の話を持ちかけて來たら、必ずドイツ側に與へるものをも用意して居たであらうことは言ふまでもない。これを、他人の爲に火中の栗を拾ふものだと言つて逃げたベルリン政府の局量は狹きに過ぎる。ドイツが手を引いた結果は日英同盟となり、一九〇四年の日本の勝利となつて日露戰爭は終局となつたが、あの當時にドイツの外交界に具眼の士があり、日本の引受けた役をドイツが引き受けて居たらどうであつたらう。恐らく後年の世界戰爭などは起らなかつたであらう。一九一四年から一九一八年に亘る數年の戰でドイツは多大の人命を失つた。これは一九〇四年に起つたであらう獨露戰爭をドイツが回避した爲である。當時ドイツが日本に代つてロシヤを叩いて居たら、犧牲は世界大戰の十分の一ですんだであらう。奈何にも殘念なことであつた。あの當時戰つて居たら、ドイツの地位は今日隆々たるものがあつたであらう。」

調—0113

0007

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

當時の日露戰爭が獨露戰爭であつたら、各國の外交關係も今日とは著しく異つたものになつて居たであらうことは想像に難くない。然らば何が故に當時のベルリン當局が自らイギリスと同盟してロシヤと戰ふことを避け、日本に同盟の相手をさせたか。一九一六年刊行されたビューロー公の備忘錄はそれに對する回答を與へて居る。附錄として輯末に添へたものがそれである。就いて覽られんことを望む。

以上

目次

緒言……一—四頁
第一章　ミュンヘンの卷……一
一　有害無益の三國同盟……一
二　四つの生き方……六
（イ）產兒制限……六
（ロ）國內開發……七
（ハ）領土擴張……一一
（ニ）商工本位……一一
三　新領土の獲得……一二
四　英と結ぶか、露と結ぶか……一九
五　國家と經濟……二七
第二章　新三國同盟論……三四

調—0113

0008

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一　外交の本義……三四
二　明日の獨立……三五
三　誤れる舊三國同盟……三七
四　現下の歐羅巴……三九
五　同盟の相手……四四
六　盟邦としてのドイツ……四七
七　南チロルの問題……五一
八　ドイツの復興……五四
九　排獨輿論の處理……五六
一〇　ユダヤ人の惡戯……五九

第三章　獨逸の對露政策

一　ナチス外交の要諦……六三
二　地狹く人寡し……六五
三　近代ドイツ外交の失敗……六七
四　東進の必然性……六八
五　領土擴張の目標……七〇
六　國境變更の原動力……七三
七　地續きを必要とす……七四
八　東進の好機……七五
九　ビスマルク外交の檢討……七七
一〇　敗殘の劣等民族……七八
一一　獨露同盟是非……八二
一二　東方政策の一手……八六
一三　英・獨・伊新三國同盟……八六

第四章　獨逸と佛蘭西

一　自業自得……八九
二　フランスの狙ひ……九一
三　獨佛危機の絶頂……九三

調一0113
0009
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

四　ルール侵入……九五
五　禍根マルキスト……九九
六　巨人ムッソリーニ……一〇一
七　クノー宰相國を誤る……一〇二
八　最高の眞理……一〇六
＊　＊　＊　＊
附錄　ビューロー公「備忘錄」より……一〇七
索　引……一一一

第一章　ミュンヘンの巻

一、有害無益の三國同盟

一九一二年の春、私は遂に待望のミュンヘンへ來た。私はドイツの美術を研究して居た關係上、ミュンヘンへ着いたのは始めてであるにも係らず、一度足を踏み入れると、以前から知つて居た町のやうに思はれた。ミュンヘンは良い町だ。ミュンヘンを見ざるものはドイツを語る能はず、ミュンヘンを見ざるものはドイツの藝術を見ざるものである。

時は未だ世界大戰以前であり、私にとりてもミュンヘンの生活は生涯のうち最も平和な、そして又最も幸福な時代であつた。生活は苦しかつた。繪をかく爲に生きて居るのか、生きる爲に繪をかいてゐるのか判らぬ程の窮乏であつた。それでもいつかは自分の目的が達せられるものと思ふと、パンの苦しみなどは何でもなかつた。

私がドイツに來て苦勞を苦勞ともしなかつたもう一つの理由は、ミュンヘンが純ドイツの都市であることだ。ヴィーンはあらゆる人種のごみをかき集めたやうなところである。それに比して生粹のドイツ人だけのミュンヘンの町の氣持よさはどうだ。町の人々の言葉が私の故郷のそれに近いことも私

調一0113
0010
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の欣びの一つであつた。かくて私の生涯はこの町と結びついて離れ難きものとなつたが、何と言つても私を引きつけたものはこの町の持つ美しい魅力であつた。

私の勉強と言へば繪をかくことの他はやつぱり政治、殊に外交であつた。外交についていつも私に不可解と思はれたのは、ドイツとオーストリとの同盟であつた。このことに思ひ至つたのはヴィーンに居た時からさうであつたが、ドイツへ來てから益々その感じが強くなつた。私は考へた、オーストリとの同盟が當にならぬものであることは、ベルリン當局だつて知らぬ筈はない。さりながら、オーストリとの同盟はビスマルクの創意に出たものであり、之を壞すのは故人に對してすまぬといふ感じがあるのであらう。之が一つ。又永く續けて來た同盟を俄かに廢棄すれば、第三國に乘ずべき機會を與へる虞がある。之が二つ。ベルリン當局は之等の點を考へて廢棄を躊躇してゐるのであつて、オーストリの賴りにならぬことはとつくに知つて居るのであらうと。

然るにかく信じたのは私の間違であつたことが間もなく解つた。ドイツではオーストリの眞相を知るものがなく、オーストリは今でもドイツ民族の國家であつて、一朝事あれば兵を出してドイツと生死を共にする國だと考へて居た。何ぞ誤らん、オーストリは既にドイツ民族の國家ではないのだ。その上オーストリは土崩瓦解の危機を胎んだ國なのだ。ドイツでは上下ともにこの事實を悟らなかつた。

他のことは別として、オーストリを知ることに於ては私は本職の外交家なるものより遙かに優つて居た。オーストリにはドイツとの同盟に誠意がなかつたのである。その證據には、ドイツ人の多いオーストリ本部はさうでもないが、一度首都を去つてプラーグあたりへ旅行すると、公然三國同盟を呪ひ、平和の間こそ存立するが、一度干戈を交へることになれば、三國同盟は直ちに瓦解するんだ、と言つて居た。

イタリーがオーストリと行動を共にせざることも始めから解り切つたことであつた。世界戰爭が勃發して愈々三國同盟が結束を示すや否やといふ時になつて、イタリーは先づ中立を守り、後敵國となつたのを見て、ドイツ人は非常な憤懣を感じたけれども、イタリーが最後迄同盟に追隨して來るものと見る信者があるとしたら、それこそは外交的の盲目漢である。

他方オーストリの事情を見るに、國內で三國同盟を欲する者は、ハプスブルグ王家とドイツ人とのみであつた。ハプスブルグ王家の同盟を欲したのは利己的打算に依るものであり、オーストリ・ドイツ人の同盟を欲したのは、迂闊にして外交の頭がなかつたからである。といふのは、ドイツ人は同盟を以て本國ドイツの地位を强めるものだと信じて居たけれども、少くともオーストリとの同盟は、厄介者を背負込んで居るものであることに氣がつかなかつた。然しハプスブルグ王家から言へば、同盟さへして居ればドイツ方面からの攻擊を免かれ得るのみならず、國內のうるさいドイツ人を抑へて行

調一0113

0011

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

くのに都合が良いといふ利益があつたのだ。

オーストリのドイツ人は本國のドイツ人がハプスブルグ王家を信じて居り、ハプスブルグに盾つくものは、ドイツとオーストリとを共に害するものだ、と批難されるから、心に不滿を感じても之を外に出して攻擊することが出來なかつたこと勿論である。

ハプスブルグの政策は、寧ろスラヴ諸族の勢力を引き來つてドイツ人を掣肘するにあつた。オーストリ國内のドイツ人が勢力を伸して行つてこそ同盟の利益があるのだ。オーストリが同盟を利用してドイツ人を壓迫すると言ふに至つては同盟の價値果して何處にありやと問ひたくなる。試みに思へ、オーストリのスラヴ諸族が跋扈し、オーストリがドイツ民族のオーストリでなくして、スラヴのオーストリと化し去つたらどうだ。そんなものと同盟して居て駄目なことは、論者を俟たずして知るべきではないか。

ドイツはかくてオーストリ國内の事情に不案内であつた。オーストリは年を逐うてドイツ人のオーストリよりスラヴ族のオーストリへと變じつつあつたのだ。而もこの如き國家との同盟が役に立つものと考へて七千萬ドイツ人の運命を、之に托しつつあつたベルリンの外交は驚くべき錯誤であつた。

他方イタリーとオーストリとの提携が不自然であつて、兩國は寧ろ吳越の關係にあるものなるは少しく歴史を學べる者の十分に知つて居るべき筈である。若しローマ政府が同盟の誼に依つてオーストリの爲に兵を動かすやうなことがあれば、國内に革命が起つたであらう。ハプスブルグ王朝は、一再ならずイタリーの獨立と自由を抑壓した。イタリー人は深く之を怨としてゐるから、オーストリに對しては怨を忘れようとしても容易に忘れられないイタリーである。況んや怨を忘れる意思が政府にも國民にも皆無とあつては、兩國關係のシックリゆく道理がない。イタリーとオーストリは同盟を結んで平和につき合つてゆくか、然らざれば戰爭あるのみだ。イタリーは前者を選んだ。而して同盟を選べるが故に、その間に同盟者に對する戰爭の準備が出來た。

かくて三國同盟は寧ろ有害無益の存在となつた。殊にオーストリとロシヤとの關係が險惡を加ふるに至つて、同盟はドイツにとり馬鹿々々しいのみならず、國家に危險なものとさへなつた。

抑も同盟は何の爲に締結するのか。己の國だけでなく他國と提携すれば前途を安全にし得る、と考へるからである。ところでドイツの前途の安全とは、ドイツ民族の前途を確保することである。ドイツとオーストリとの同盟はこの立場より再檢討する必要があつた。

ドイツは毎年九十萬人宛の人口增加を示してゐる。而して將來益々增加の傾きがある。從つて豫め之を養つて行く方法が講ぜられねばならぬ。然らざれば國民はドン底生活に落ち込むの他はない。之に處するの途は凡そ四つあつた。

調一0113
0012
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

二、四つの生き方

(イ) 第一はフランス流に産兒を制限して人口の過剰を防ぐことである。

自然界には自然淘汰の現象が行はれる。戰爭があつたり、陽氣が惡かつたり、或は又飢饉の年などには、生れた子供が多く死ぬ。之は自然の産兒制限ともいふべきものである。

さりながら、人間の産兒制限と自然界の制限とには大きな相違がある。自然界の産兒制限は生れた子供のうち生存に堪へないものを死亡させるのであつて、生れて來ることには制限をつけない。それ故に、生殘るものは缺乏と困難とに打勝つた優秀なものばかりとなり、民族の生存力はそれに依つて益々强固となるばかりである。自然界の産兒制限は所謂自然淘汰なるものである。自然淘汰はかくて人口の過剰を制限するが、民族の質はそれに依つて反つて良くなる。之に反して人間の行ふ産兒制限はよくない。人間界の産兒制限は生れて來たもののうちから惡いもの、弱いものを淘汰して、强いもの、優れたものを保存するのでなくして、始めから生れること、即ち人間からいつて生むことを制限するのである。人は之を以て、生んでから死なせるよりは、始めから生むことを制限するのが人道的で道理にも叶ふものと考へて居るが、それが大間違だ。

蓋し、自然淘汰は生れて來ることに制限を加へずして生れて來たものを淘汰するのであるから、

殘る者は何れも優者たるに反じ、人間の産兒制限は生むことを制限して、生れて來たものはあらゆる手段を盡して生かさうとするから、生存する者は自然淘汰に依るものの如く强くない。人類の發展は自然淘汰に如くはないが、人間は淺はかだから、不自然な制限を以て自然淘汰にまさるとなしいつまでも己の無智を悟らうとはしない。

自然淘汰は生存競爭を本とし、優勝劣敗の法則に依つて人口を制限するが故に、殘るものは優者となり、この殘る優者が更に優れたる子孫を設けて民族の强盛を來すが、人間の産兒制限は優勝劣敗の原則に反し、弱い者、劣れる者を保存するが故に子孫は益々弱くなり、劣れるものとなつてゆく。從つて産兒制限を行ふ民族は他日産兒制限を行はず、自然淘汰に任せる强い民族に驅逐せられて、この世から跡を絶つに至るであらう。何となれば、强き民族の生きんとする强き意思はあらゆる人爲的の鐵鎖を破壞して、驛足を伸べんとするが故である。故に曰く、ドイツに於て産兒制限を奬勵せんとする者はドイツ民族の將來を奪はんとする者である。

(ロ) 第二の方法は國内開發である。

土地の生産力は、或程度迄開發に依つて高めることが出來る。それ故に、增加して行く人口は國内の開發に依つて相當の時期迄は支へて行くことが出來る。さりながら國内開發には限りがあつて人間の慾には限りがない。試みに百年前のことを考へて見ると、我等の衣食住は頗る贅澤になつて

調一0113

0013

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

居る。今後百年も經つたら、我等の子孫は更に我等より資澤となるであらう。人間の資澤は盡くるところを知らずして、地力には限りがあるのみならず、土地には遞減の原則があつて、年を經るに從ひいくら耕しても土地の生産は增加しなくなるから、生産が遞增せずして人間だけが多くなつて行くと、偶々作柄が惡ければ直ちに飢饉で、おしまひには餘程の豐年でないと國民が安んじて食つて行けないといふ時代が來るに相違ない。かくなると再び自然淘汰の方法が行はれるか、或は又産兒制限を厲行するの他に途がなくなる。

或は曰く、今こそ飛んだり跳ねたりして居られるが、遂には食ふものもなくなつて死滅するのは地上に於ける人類共通の運命であつて、ひとりドイツ人ばかりのことではないと。

この論は一見道理のやうだが、考へて見ると必ずしもさうではない。今後地力が遞減し、增加する人口を支へることが出來なくなれば、どこの國でも産兒制限を行はねばなるまい。然らざれば自然淘汰が行はれ、何れにしても人口を制限しなければならなくならう。之は論者の言ふ通りでドイツばかりではない。さりながら、その時になつて、一番早く制限しなければならなくなる國民は、自分の力で必要な土地を獲得することの出來ない弱い國民であつて、土地を擴げ得る强い國民は同じく制限するにも餘裕がある。現に地球上には、今尙豐饒な土地が放棄せられて、耕す者の來りて開發するのを待つて居るところが少くない。之等の土地に擴がつて行けば、尙永く生存を主張して

行くことが出來る。蓋し、土地には定主がない。之を耕し利用する者、之が主人たるべきである。自然はかくて政治的國境を知らない。天は生物を地上に降し、之を自由に競爭せしめ、優者をして世界を支配せしめる。

若し他の民族が廣き土地を擁して盛んに繁殖する時から、內に引籠り、國內開發に依りて僅かに生存を續けんとするならば、他の民族の發展を餘所に見て、自らはみじめな人口制限に近路を見出さねばならなくなるだらう。而して土地愈々小なれば、人口制限の時期が來ること愈々速かである遺憾ながら、この世にありては優秀にして文化の粹ともいふべき優れたる國民が狹き土地に蹐跼し他の領土をも侵さず、國內開發を以て甘んずるに反し、劣等なる國民が有り餘る土地を擁してのさばつて居る。その結果として次のやうな現象が生ずる。卽ち文化的に優れて居ても、遠慮勝な民族は早くも人口制限の必要に迫られて內に小さくなつて居なければならないのに、文化的に劣等でも他を押しのけて進むあつかましい民族は、廣い土地を所有して益々繁殖して行くことである。

ところで他日この世界が民主的に動かされて行くものとすれば、數に於て多い民族がこの世を支配することになる。民主的でなく力に於て强いものが勢力を占めるといふことになれば、他を押しのけても進む强い意思を有する民族が支配することになり、何れにしても遠慮して小さくなつて居る民族の天下にはなりつこなしだ。

調一0113

0014

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

世界が人類闘爭の世界であつて、今後も尙恐しい生存競爭の戰の行はるることは疑ふの餘地がない。畢竟この世に在りて賴みとすべきは民族保存の本能のみだ。所謂人道などは顧みるに足らぬ。人道は魯鈍と怯懦と半可通のコクテールであつて、生物の强い本能の前には春の淡雪の如く果敢なく消え去るの他はない。人類は永遠の闘爭によつて偉くなつた。永遠の平和などになつたら腐つて了ふであらう。

頃者ドイツには平和だの、人道だのと云ふ論者が多くなつて來た。彼等は、他國の領土を侵さずとも國內開發に依つて增加して行く人口を支へて行ける、と云ふ。而して一般國民も亦之を是とするものの如くである。これ最も有害なる說である。國民は國內の開發に甘んぜずして必要なる土地を國外に求むべきである。國內に萎縮して居るやうな國民は救ひ難い國民である。戰を恐るる思想はユダヤ人の齎らせるものである。

國內開發にもいくらか良いところもある。今日國內の土地は一般スペキュレーションの對象とされて居る。國內開發は、土地のスペキュレーション及び之に類せる他の社會問題解決の方法としては一つの策たるに相違ない。さりながら、新たに國外に領土を加へずして、國內の開發だけに滿足せんとするは、斷じて國民の前途を確保する所以でない。

何となれば、國內の地力はやがて盡き、それと共に我等の力も盡きるからである。

最後に領土廣からざれば、國の守りが固くない。小さい國はわけもなく押しつぶされるが、廣い大きい國になると之を征服することが容易でない。從つて、領土の大なることは國防の第一條件である。國土が大きければ之を征服すること困難なるが故に、大きい國に對しては容易に手出しが出來なくなる。之、領土の小なるものより大なるものが國防上有利の地位を占むる一つの理由であつて、大なる國は國家が自由と獨立を維持する上に於ても一日の長ある所以である。

以上擧げ來つた二つの生き方、卽ち「產兒制限」と「國內開發」の兩策は所謂保守派とか、或は又社會民主黨に對して國家主義の諸黨と稱せられる人々に依り反對せられ、ドイツに於て行はれなかつた。但し國家主義の政黨が產兒制限に反對せるは、產兒の制限は不道德だといふにあり、又國內開發に反對せるは、地主の多き國家主義政黨が土地收用を恐れた爲である。而して事實に於て社會黨の國內開發案は地主より土地を奪ひ、之を國有その他に移さんと企圖せるものも少くなかつたのである。かくて增加して行く人口を養ふ途はドイツにとりて他の二つが殘されるばかりである。

(ハ) 卽ち、その一つは年々增加して行く人口を養ふ爲に、外に領土を擴張し、國民の食ふものを國內で造ることであつて、他の一つは、

(ニ) 外國市場の爲に必要な貨物を作り、或は又必要な勞務を提供し、それより生ずる賃上金を以て食つて行くといふ、所謂商工政策本位の國策である。

調一0113

0015

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

即ち、領土を擴張するか、植民政策及び商工政策で行くか、といふのである。かくてドイツは右兩箇の政策について檢討し、激しい贊否の議論を重ねた結果(ニ)を採用することとなつたが、策としては無論(ハ)を選ぶべきであつた。

三、新領土の獲得

年々增加する人口を收容する爲に、國外に新領土を獲得するはひとり現在ばかりでなく、國家百年の大計である。

領土擴張には種々の利益が伴ふが、就中、領土の擴張に依りて農民階級の沒落を防ぎ、之を支持して行くことだけでも少からざる利益である。今日我が國には、上下を通じて種々の惱みがある。而もこの大部分は都市と農村との不均衡に原因を發するものである。古今東西を問はず、農は國の本であつて、中小農は社會的疾病に對する清涼劑である。現在は商工業が經濟界の王座を占めて居るが、農本主義となれば商工業は末業たるの地位に復する。而も商工業が國内に於て需要供給の媒介をなし、過不及なからしむるに於ては、良く國民食料の自給を確保し、從つて國家國民の獨立自由を防護するに至るであらう。

扨てここにドイツが過剩人口を收容すべき土地を求むるとすれば、それはカメルンなどの海外植民地でなくして、その土地は必ず、歐羅巴大陸のうちに求められねばならぬ。而も目を擧げて見れば、或國は五十倍も廣い土地を擁し、或國は五十分の一にも足らぬ狹い領土に跼蹐して居る。天がこの地球を創つたのは、一國、一民族に私せずして、普く住むべきものに場所を與ふるにあつたとすれば、我等は空しく政治的國境に遮られて居るべきでなく、進んで必要な土地を獲得すべきである。之が我等の哲學である。

この如きはもとより吾人の欲して爲すところではないが、自己保存の權利が之を然らしめるのである。吾人は先づ口を以て說いて見る。それで肯かねば腕づくで行くの他はない。現代は平和々々といふが、若し吾人の祖先が同じく平和々々と云つて戰ひとることを知らなかつたならば、ドイツの領土は現在の三分の一にも達しなかつたであらう。幸ひドイツ人は自己保存の爲に斷乎として戰ふの本能を失はなかつた。而して必要なる土地を力に依つて獲得するの勇氣をもつて居た。東部國境の兩州は即ちその賜として吾人に殘されたものである。

ドイツが新領土を外に求むるには更に次のやうな理由がある。

歐羅巴列强の多くはピラミッドの如き生活をして居る。之海外の植民地に力を用ゐ、海外貿易に生命を托して内を忘れ、國の重心が外にあつて、本國に重心がない爲である。之に反して米國は國内の生活を本として餘力を國外に用ゐて居る。國の重心が本國にあつて、生活が外にかかつては居ない。

調一0113

0016

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

之卽ち米國の國礎が固くして、歐羅巴列强の國礎の脆弱なる所以である。

こゝに注意すべきは、同じく國礎の弱い歐羅巴といつても、そのうちで英國が尙一番强いのは、英帝國の大なるが爲でなく、寧ろ米國と提携してアングロ・サクソンの世界を形成して居るが爲であつて、之亦民族の經りが奈何に大切なことであるかを立證するものである。

されば、ドイツとして、新たに領土を求むるとすれば歐羅巴に於てすべきは當然である。植民地は歐羅巴人の大量移民に適しないから、之を得ても人口問題の解決にならないばかりでなく、ドイツが國際政界に乘り出した頃は、植民地は既に各國間に分割せられて殘されたものがなかつたから、之を得んとすれば、戰爭に依つて奪取するより他に途がなかつた。而もどの途戰爭をしなければならぬものなら、海外植民地を爭つて戰爭をなすよりも、歐羅巴大陸に於てドイツ人の移住地を求めて戰爭をなした方が得策であつたのだ。

さりながら、歐羅巴にて領土を擴げるといふは、ドイツが最後の精力を傾注し盡して始めて達せらるる程の大事業であるから、なまなかに手出しをしてはならぬ。之を始めるからには、徹底的に遂行するの覺悟を要する。而してこの目的のためには何ものをも惜んではならぬ。

ドイツ當局はこの見地から新たに同盟政策を檢討すべきであつた。蓋し、ドイツが大陸に於て題土を擴張すると言へば、それはロシヤを犧牲とするの他に途がない。

ロシヤを分割してドイツが大きくなるのだ。而も之を實行に移さんとし、ドイツが歐羅巴で假に同盟國を求めるとすれば、それはイギリス以外にない。

ドイツ民族は嘗て古代にありて、ロシヤへ侵入せんと試みたものである。今日ドイツがロシヤを分割せんとするものは、古代に於てなされたドイツ人の東進運動を復興するに過ぎない。而も今日に於て東方に進出せんとすれば、西部から背後を襲はれないだけの背面防備が必要だ。イギリスとの同盟卽ち英獨同盟は、ドイツに對してこの背面防備の役を果すのだ。

扨て英國を抱き込むには、ドイツ側でどんな犧牲でも甘んじて拂ふだけの覺悟が要る。植民地の要求は拋棄せねばならぬ。海上制覇は斷念せねばならぬ。商工業の世界進出も差控へねばならぬ。これ等のものはドイツにとりてこの上もなく惜しいものには相違なからうが、英國の歡心を買ふ爲には、惜しいとか惜しくないとかは言つて居られぬ。ドイツが植民地を捨て、海軍の野心を捨て、世界貿易を捨てるのは一時の屈伏である、英國を味方としてロシヤを處分するのは永遠の大策である。

顧みれば、この意味でイギリスが一度ドイツに接近して來たことがあつた。近年ドイツの人口は年々急激な增加を示して居る。ドイツとしては之等の年々增加する人口を養ふ爲に適當な手段を講せねばならぬ。而してロシヤを處分することが一つの方法であり、世界市場に活躍することがその二であり、植民地を得ることがその三である。

調一0113

0017

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

然るに第二、第三の方法は必然イギリスとの衝突を來すものであり、第一の方法は是非ともイギリスとの提携に待たねばならぬものである。つまり人口問題解決の爲にドイツは英と提携するか、或は之を敵とするかの分岐點に立つて居たのである。而も提携は寧ろロンドン側から仕かけられた。時期は恰も十九世紀の終末から二十世紀へかけての時であり、具體的に云へば日英同盟の締結直前である。ロンドンはしきりにベルリンへモーションをかけたものである。然るにベルリン筋ではイギリスの秋波を以て危險な誘惑となした。イギリスの誘に乘るは他人の爲に火中の栗を拾ふことだとしてその誘を避けた。同盟は、「與へて、貰ふもの」であり、「貰つて、與へるものだ」。與へるだけの同盟もなければ、貰ふばかりの同盟もない。イギリスから同盟の話を持ちかけて來たら、必ずドイツ側に與へるものも用意して居るであらうことは言ふまでもない。それを他人の爲に火中の栗を拾ふものだと言つて避けたベルリン政府の局量は狹きに過ぎる。

ドイツが手を引いた結果は日英同盟となり、一九〇四年の日本の勝利となつて日露戰爭は終局となつたが、あの當時、ドイツの外交界に具眼の士があり、日本の引受けた役をドイツが引受けて居たらどうであつたらう。恐らく後年の世界戰爭などは起らなかつたであらう。一九一四年から一九一八年に亘る數年の戰でドイツは多大の人命を失つた。これは一九〇四年に起つたであらう獨露戰爭をドイツが回避した爲である。當時ドイツが日本に代つてロシヤを叩いて居たら犧牲は世界大戰の十分の一ですんだであらう。奈何にも殘念なことであつた。あの當時戰つてゐたら、ドイツの地位は今日隆々たるものがあつたであらう。

さりながら、事茲に至ると、オーストリとの同盟は實に意義のないものとなつて來る。

蓋しオーストリのドイツと同盟せるは、共に手を携へて戰場に臨まんが爲でなくて、姑息の平和を求むる爲である。ドイツとの同盟はオーストリの事勿れ主義に端を發せるものであつて、オーストリは戰爭を避けつゝ、國内のドイツ分子を徐々に去勢する魂膽であつたのだ。

ドイツがオーストリと同盟せるは、オーストリ國内のドイツ人を頼むが爲である。さればハプスブルグ王朝にして國内ドイツ人の去勢又は排除に力むること明かなる以上、ドイツ當局はヴィーンと絶ち、オーストリ・ドイツ人千萬人を引きとつて世話する程の度胸があつて然るべきであつた。何れにしても、オーストリ・ドイツ人を見殺しにすべきではなかつた。然るにも係らず、ドイツがオーストリを捨てることの出來なかつたのは專ら因循姑息に依るものだ。ドイツは戰を恐れて戰にまき込まれ世界平和に執着して世界戰爭に到達した。

ドイツはこの如き事情に依り、ドイツにとり最も賢明な策であつた(ハ)の策、卽ちロシヤに伸びるの策を採用しなかつた。ドイツが歐羅巴で新たに土地を得んとすれば、それは東方に於てするより他の方法がないこと、繰り返し述べた如くである。而も東方に進出せんとすればロシヤとの戰爭を覺悟

調一0113

0018

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

せねばならぬ。何事を犠牲にしても平和を欲するベルリン當局にはその肚がきまらなかつた。

かくてドイツの外交は、いつのまにかドイツの將來を確保することでなくて、世界平和を確保することになつて居た。

而してこの如き外交政策が、奈何なる結果に到達したかは世人の親しく知るところである。

この事に就ては、後に尙述ぶるところがあらう。

かくてドイツは、第四策卽ち(ニ)の策をとるの他なきに至つた。工業奬勵と世界貿易、海軍擴張と植民政策、之がドイツの採用せる國策となつた。

商工本位の政策や海軍建設は勞を用ゐること少くして功を擧げること比較的に速くて容易である。拓地植民の事業は勞を用ゐること多くして、效果の擧がることは遲く、時としては十年や二十年でなく、數百年の歲月を必要とすることもある。その代り事業が手堅く恒久的である。商工業を基礎とする國家は興ること速かなる代りに、倒れることも速かである。商工本位の國の榮はシャボン玉のはかなさである。海軍の建設亦然りであつて、軍艦を造ることは、土地を拓いて農民を移す仕事に比して容易であるが、その代り一朝擊沈されると、それ迄である。之も頼むに足らぬ。

ドイツが商工本位の國策を採用し、海軍擴張に乘り出したのは良い。然しこの政策と雖も遂には戰爭を惹起すものであることに氣のつかなかつたのは遺憾だ。ドイツはかくて所謂各國の平和なる競爭のうちに國民の生活が確定されるものと信じて居た。さりながら、世界貿易と海上政策とを採用すればイギリスが默つて見て居る筈はない。ドイツは遂にイギリスを敵として戰はねばならなくなること三尺の兒童にも解りきつたことであつた。ドイツの世界貿易の伸びるに從つて、果然イギリスは露骨な壓迫を加へ來つた。而して壓迫を蒙るに及んで始めて憤慨したが、それは無論ドイツの迂濶であつた。

四、英と結ぶか、露と結ぶか

英人は勾配が速い。遺憾ながらドイツ人には勾配の速さがない。ドイツの領土擴張卽ち東進政策はイギリスと同盟してロシヤに當ること既に述べた如くである。反對に海外植民や海軍建設に乘り出さんとすれば、ロシヤ人と結んで英國に當るの外なきこと、之も自明のことだ。而してロシヤと提携せんとするなら、先づオーストリと手を切らねばならぬことも自明のことだ。而もドイツにはその何れもが出來なかつた。

蓋し、どの方面から見ても、獨墺同盟は戰前既に無意味といふよりも寧ろ有害なものとなつて居た。

陸に伸びんとすればイギリスと提携してロシヤに當る必要があつた如く、海に發展せんとすれば、ロシヤと結んでイギリスに當るの他なきは明かな事實である。然るに、第一の場合にはイギリスと結ぶことを肯んじなかつた如く、第二の場合にはロシヤと同盟に入るだけの肝がなかつた。それは何れ

調一0113

0019

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の場合に於ても戰爭を覺悟せねばならぬからであつて、ドイツ當局が遂に商工本位に移つたのは畢竟この戰爭が恐いからのことであつた。ドイツ當局は世界から暴力を排し、平和な經濟政策に依つて地上の諸國を征服し得るものと考へて居た。それでも時々イギリスから氣味のわるい脅しが來る毎に、抑え難き不安を感じて海軍の建設を急いだが、惜しむらくはドイツの海軍政策も亦半上落下のだらしないものであつた。苟も工を起さざれば止む、一度海軍を起すならイギリスを攻撃し、その海軍を撃破する程のものを作るべきだ。進んでここに出る能はず、海軍を造つても專ら防禦を主とし、イギリスを攻めるだけの覇氣を持たず、徒らに世界平和や經濟的征服などを口にしてお茶を濁して居たのは千秋の恨事であつた。かくてドイツはイギリスを憚り軍艦も多く造らず、單艦噸數も思ひ切つて大きなものが造れず、裝備に於ても控へ目勝であつたのは、イギリスに對して專ら他意なきを示す爲であつた。

抑も暴力に依らず經濟によつて世界を平和裡に征服する、之を世界の經濟的征服といふ。さりながら凡そこの世の中に經濟的征服の可能を信ずる程馬鹿げたことはない。殊にイギリスを以て經濟的征服に依つて今日の大をなすに至つたものだと考ふる程お目出度いことはないのだ。若しイギリスを以てその大をなした所以が、平和な經濟的征服にありとなすものがあつたら、それは歴史を讀むことを知らないものだ。遺憾ながら我國の學者中には歴史を讀み違へて居るものが少くないのだ。

イギリスの所謂經濟的征服は劒に依りて準備され、劒に依り維持せられるものである。イギリスの本質は外交によつて經濟的利權を得、經濟的勢力で外交をバックして行くところにある。人或は云ふ、英人は人間としては卑怯であつて經濟的征服の爲に自らの血を流すやうなことはしないと。認識不足の大なるものである。成る程英國には徴兵制度はない。併しながら軍隊の制度は時代によつて異なる。國防の本義は軍制の形式でなくて、國を擧げて戰ふ國民の覺悟奈何である。イギリスは古來その時に必要な軍隊を持つて居た。傭兵制度で事が足りる時代は傭兵制度でやつて來たが、國家存亡のときはどいいところでは國民皆兵を斷行し、戰爭の爲には全國民の貴い血をも惜しみなく戰場に注いだ。英人にはいつでも國の爲に戰ふの決意がある。

然るにドイツでは英人を見縊つて居た。英人は商賈人だから臆病だ。之がドイツのイギリス觀であつた。併し英帝國の偉大さは搖ぎもしない。それがドイツの所謂識者達には呑み込めなかつたのだ。偶々少數の人々がイギリスの油斷すべからざるを警めても耳をかすものがなかつた。然るにその報いはてきめんであつた。我等は始めてフランダで英兵と顔を合せたが、仲間の者共の顔に表はれたその時の驚きはいまでも覺えて居る。戰を交へてから間もなく、英兵は新聞で讀まされて居たやうな弱いものでなく、うつかり出來ないといふことが各自の頭に浮んで來た。

余はこの時プロパガンダのかりそめにすべからざることを知つた。ドイツ人はイギリスの大きくなつたのは同國民の平和なるが爲であるとなし、同じく平和な方法で行くならばドイツと雖も經濟の進

調一0113

0020

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

出に依つて世界が征服されるものと信じた。殊に英人はこすいがドイツ人は律義者だから、弱小諸國は勿論、大國からも忌まれることはないと考へてゐた。併しそれは大きな誤りであつた。

ドイツはかくて世界を經濟的に征服すべしとなして居た。これ卽ちいつまでもオーストリなどと同盟を續けて居た所以であつて、オーストリの如き國と同盟して居たとて、他と戰爭の出來ないことは明かであつた。オーストリとの同盟はビスマルクの如き力量の人物にしてはじめてあやつつて行けるのであつて、ビスマルクに非ざる凡庸の政治家には同盟をうまく運用して行くことは出來ない。況んやビスマルクが同盟を締結した時代と、世界戰爭以前とではオーストリの國內情勢が全然一變せるに於てをやだ。

ビスマルクの時はオーストリも亦ドイツ人の優勢な時代であつた。然るに大戰前には普通選擧制が布かれ、これまで除外されて居た他の諸民族がのさばり出し、オーストリ議會と云へばいつでも混亂の議場を聯想する程になつて居た。

この點から見ても同盟は崩解の運命にあつた。オーストリの內にはドイツの國家と異つたスラヴ諸族の國家が成長しつつあつたのだ。而してオーストリのスラヴ化と共に、ヴィーンは寧ろドイツを離れてロシヤに接近して行き、ドイツ人にして樞要の地位にあつたものは日を逐うて凋落した。同時に同盟は空虛な存在となるに至つた。前世紀の終り、今世紀の初頭に於ける獨墺關係は、墺伊の關係と異ならざる水臭いものであつたのだ。

ドイツとしてはハプスブルグのオーストリと同盟を續けて行くか、或は同盟を解いてドイツ人の抑壓——換言すればオーストリのスラヴ化に抗議をなすの他はなかつた。而も後者は同國との戰爭をも覺悟しなければならぬものであるから、ドイツは遂にその勇斷に出ることが出來なかつた。

他方三國同盟の不景氣な所以は、該同盟が積極的でなく、專ら防守に止まつて居たことが一つの原因であつた。蓋し各締約國が進んで執るべき目標があつてこそ活氣も出るが、防禦に終始するやうでは麻るばかりだ。

このことは當時既に議論があつた。氣のつかなかつたのは所謂外務省の役人ばかりだ。一九一二年にルーデンドルフは三國同盟の缺陷を指摘して注意を喚起した時、例の「外交家」といふ連中は一顧の價値なきものとして問題にしなかつた。外交家などには簡單なことが解らぬと見える。

三國同盟のあてにならぬことは、かくて早くから一部の人々の間に明かになつて居た。されば一九一四年の世界戰爭がオーストリが元となつて始まつたのは、ドイツにとつて勿怪の幸であつて、若し逆になつて居たら、ドイツだけが戰はねばならなかつたであらう。ドイツが仕かけた戰爭であつたらオーストリは決して共に起つことがなかつたであらう。他日イタリーが背き去つた時、ドイツ人は非常に憤慨したけれども、あの戰爭がオーストリの仕かけたものでなくてドイツが口火を切つた戰爭で

調—0113

0021

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あつたら、恐らくはオーストリはイタリーと同じく「中立」を守つて戰に加はらなかつたであらう。何となればオーストリにしてドイツを助けて起たんとすれば、國内のスラヴ族は一樣に蜂起したであらうと思はれる。オーストリは果して後に至つて、スラヴ族に依り内より破壞されることになつたがヴィーン政府が戰爭の始めにドイツの爲に起つたとしたら、他日を俟つまでもなく一九一四年にスラヴ族はオーストリを亡して居たらうと思はれる。オーストリはこの如く危險な國であつたのだ。

そればかりでない。オーストリとの同盟にはその他にも種々の危險が包藏されて居たことに氣のつくものは多くなかつた。

危險の一つはオーストリの崩解をねらつて居るものが餘りに多かつたことである。オーストリには敵が多過ぎたのだ。而して之等のオーストリの崩解を欲するものはドイツを目の敵とした。蓋し、倒るべきオーストリの倒れないのは、畢竟ドイツが支へて居るからである、と考へられたのだ。かくてヴィーンを倒すにはベルリンから倒してかからねばならぬといふ考へが自然に浮んで來たのである。第二はオーストリとの同盟の爲に、ドイツはロシヤ又はイタリーと心からの提携が出來なかつたことである。イタリー人はオーストリを憎んで居たけれども、ドイツに對しては親しみを持つて居た。

ロシヤはドイツが歐羅巴で領土を擴張するの政策をとれば敵とすべきだが、ドイツが農本主義を捨てて商工本位に行くことになれる以上ロシヤと爭ふ理由が一つもない。兩國は相親しむべきであつて衝突すべき理由は毫もなかつた。唯、爲にするところあらんとする者が、中傷を試みるばかりであつた。現に當時獨露戰爭を煽つて居たものはユダヤ人のみであつた。

第三はドイツに對して敵意を包藏する國家がオーストリを好餌として同盟國を釣り、ドイツ包圍政策を組織する虞があつたことだ。第一、第二の危險も小さいものではないが、第三の危險は獨墺同盟に附隨せる最も惡性な危險であつた。後年エドワード七世が四國協商を造り得たのは、オーストリの分割を豫定してロシヤとイタリーとを誘つた爲であつて、オーストリといふ餌がなかつたら、奈何に外交に巧みなエドワード王でもドイツ包圍政策を遂行することが出來なかつたであらう。かくて各國のねらつて居るオーストリを盟邦としたことは、とり返しのつかぬドイツ外交の失敗であつた。その上に同じく崩れかかつて、他からねらはれて居たトルコまで背負込んで居たことは、外交上に於けるドイツの立場を益々不利なものにした。

他方ドイツがこの如き不利の地位にあつたことは、世界を股にかけるユダヤ財閥に乘ずべき機會を與へたものである。ユダヤ人は世界の各國を擧げてユダヤ金權の勢力下に置かんとするものである。而して多くの國は既にユダヤ人の喰ひ物となつて居るに拘らず、ひとりドイツのみは未だ彼等の自由にならなかつた。ユダヤ人としてはどうしてもドイツに打擊を加へる必要があつた。かくてユダヤの財閥まで參加してドイツ包圍政策は益々勢力を加へて行つた。

調一0113

0022

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ドイツとオーストリとの同盟は、ヴィーンに居た頃から怪しいものだと思つて居たが、前記のいろいろの事情を看來るに及んで、同盟に對する私の疑念は深まるのみであつた。

オーストリは既に瓦解に瀕せる國である。瓦解に瀕せる國と同盟するものは、己も亦そのそば杖を蒙らねばならぬ。これ私の深く憂へて止まざるところであつから、友人との話の際にはいつも之をいつて、ドイツの早きに及んで善處すべきことを力説した。この信念はその後も益々固くなつて行くばかりで一度も變つたことはなかつた。然るにそのうちに戰亂騷ぎとなり、本國のドイツ人迄夢中になつて戰の中に飛込んで行つたが、既に戰が始まり、戰場へ出てからも、機會さへあれば私の持論を持ち出して同僚に說いたものである。オーストリとの同盟は之を廢棄することが一日早ければ、ドイツにとつて一日の利益がある。オーストリをつきとばすことは味方を喪ふに似て損するが如く見えてもオーストリと離れて終へば、オーストリをぬらつて居た國々も亦ドイツを敵としなくなるから、差引して損ではない。ドイツはドイツの爲に戰ふべく、亡び行くハプスブルグ王家の存亡に關與すべきでない、と信じた。

一部のものは戰爭の始まる前から、同盟の前途に疑念を持つて居たことを曩にも述べた。保守黨の間では、オーストリを賴りとすることの危險を說くものがあつたけれども、馬耳東風と聞き流されて實行の運びに至らなかつた。當時かの所謂世界の經濟的征服論がひとり勢力を逞うして居た。經濟的征服は、その效は大にして犧牲は言ふに足らぬ程小さい、と說かれたものである。

我等の議論は「素人の外交論」とせられた。かくて素人外交家は、玄人の外交家が國家民族を率ゐて亡びの淵にころげ込んで行くのを傍觀しながら、どうすることも出來なかつた。

五、國家と經濟

何といつても經濟的征服は空想である。この空想を實際政治の綱領とし、世界平和の維持を外交の唯一の目的とするが如きは、愚の骨頂である。而も國を擧げて之を得策なりと信じて居た所以のものは、國民の政治思想が麻痺して居た爲である。

近年ドイツの工業の進步、對外貿易の發展は目ざましいものがあつた。この進步發展は固より國家の庇護下に於てなされたものであつた。然るに一部の者は反對に國家の存在さへも經濟に依倚するものだと考へた。彼等は云つた、國家の施政は國民經濟の發展を目標とすべきものであつて、それが國家として自然な役割だと。

さりながら、國家は經濟を目的とするものでない。經濟の發展以外に意義なしとする者は、國家を以て商賈の爲に一定の領域に集まれる商賈人の集團なりとなすものである。さりながら、國家は商人の集合體でなく、種族保存の共同體である。然らざれば民族に與へられた使命達成の機關である。之

調一0113
0023
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

が國家存立の理由であつて、經濟活動は國家の理想ではない。國家は種族の理想を達成する爲にいろいろの手段を必要とする。國民の經濟的活動はそれ等の手段の全部でなくて、僅かにその一部であり經濟以外に人生の目的なしとなすものはユダヤ人である。而してこれ亦ユダヤ族が寄生虫として喰込み、他の民族の血を搾つて生活し、一定の場所に國家を建設せざる所以でもある。

蓋し、ユダヤ人の國家は場所的に限らるることなくして、世界に廣がり、たゞ民族的の繋がりを以て國家となすものである。之、彼等が他民族の間に入り込み、國家の内に國家を造る所以であつて、ユダヤ教を以て結合するものの如く裝ふが如きは世間を欺くトリックに過ぎない。何となれば、モーゼの教なるものも、畢竟ユダヤ民族の保存を目的とするものであつて、宗教ばかりでなく、政治、經濟、その他國家の維持に必要なあらゆる部門を包括するが故である。

國家發生の源は種族保存の本能であつて、近頃の政治家のいふやうな經濟を目的として出來た團體でない。これは自明のことであるに係らず、政治家なるものに判らず、一部の者は經濟に依つて國家が築き上げられてゐると考へて居る。國家生活に於て貴きは、種族全體の爲に個人を捨てて顧みざる犧牲の精神であつて、商賈人根性は人として決して貴ぶべきものではない。詩人は歌つて云ふ、汝の命を的にかけすば、命は得られないと。個人の生命を投げ出して、國家の爲に殉ずる。そこに種族保存の意義のあることを語るのである。從つて國家存立の根本條件は、種族といふ共同觀念と、その種族を保存する爲にあらゆる犧牲を拂つても惜しいとせざる覺悟とである。

この觀念とこの覺悟とがあつてはじめて國を守る勇氣も出て來るのだ。かくて國家は個人の犧牲的精神に依つて出來るのである。それ故に激しい生存競爭に於ても犧牲的精神の强きものは勝ち、然らざるものは他に征服せられ、最後には死滅するの他はない。國家の爲に身を捧げて悔なきは國民の元氣である。國家はこの元氣ありて榮え、この元氣を喪へば亡ぶ。國民として怜悧でないことは憂ふるに足らぬ。元氣を喪ふては萬事休矣だ。

然るに國家の元氣なるものは、經濟とは關係のないものである。經濟的繁榮は一國元氣の表象でなくして、反つて沒落崩解の前兆であることは、古來の歷史が雄辯に物語るところである。若し或者の言ふ如く、經濟的利害が國家成立の根本原因なりとすれば、經濟的發展とともに、國家の底力も加はつて行かねばならぬ筈であるのに、事實は寧ろその反對なるは、國家の生命が經濟にのみ依るものでないことの證據である。

經濟の他に國家なし、との思想は多くのところで信仰されて居る。さりながら、之を歷史に鑑みて全然その反對であつた國に於ても、同じく經濟第一の思想の盛んなるは異とすべきである。

例へばプロシヤの如きは、物質的繁榮でなく、國民の元氣に依つて向上し來つた國家の好適例である。蓋し、國民に精神的元氣があつて始めて經濟的發展も出來るので、精神的の働きがなくなれば物

調一0113

0024

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

質的の繁榮も期し難いのである。蓋し、一國の元氣は主であつて、經濟は從である。若し主客轉倒して、經濟的利害が國家を支配するに至れば、國家は亡び、國家亡びて經濟も亦亡びる。

之をドイツの歴史に徴するに、國家の强盛なるときは、經濟も亦それにつれて隆昌を示して居るが、經濟的利害にのみ偏し、國民元氣の源たる精神的方面の開拓を閑却するときは國家は瓦解し、經濟界も亦從つて衰微してゐる。

要之、國家の源は元氣である。而して元氣は滅私奉公の大精神より發する。而もこの精神は物質的利害の念より發するものでなくて、精神的理想より發するものであることは明かである。何となれば商賈の爲に死ぬものはないが、國の爲なら欣んで戰場に屍をさらすではないか。

英人は良く這間の機微に通じて居るから、宣傳を行ふ場合にもヘマをやらぬ。戰前から戰爭中にかけてドイツでは戰はパンの爲だ、パンの爲に戰ふのだ、と宣傳させたものである。然るに英國では決して「パン」などとは云はなかつた。いつも「自由」の爲に戰ふのだと敎へた。その自由も英國の爲でなく、虐げられたる弱小諸國民の爲に英人は起つのだと敎へた。かくて英國の宣傳が戰の理由を物質的利害でなく、精神的な理想に持つて行つたのは大なる成功であつた。何となれば國民をして欣んで死に赴かしむるものは「利」でなくて「義」だからである。是をこれ知らずして、英國のやり方を嘲笑して居たドイツ當局の馬鹿さ加減こそ寧ろ驚くべきものがある。

それでも一九一四年中は、ドイツ人も尙理想の爲に戰ふものだと考へて居た。而してその間强かつた。然るに再び「日常のパン」の爲の戰だと考へられるに至つて、戰爭はもう駄目になつた。政府當局にはどうしてそんな變化が生じたかが解らなかつた。憐むべき低能兒輩だ。

人間は富や榮華の爲に戰ふのだと考へたら、その瞬間から弱くなつて、極度に死を避けんとする。命あつてのものだねだと云ふのだ。之は當然のことだ。子供の命にかかはる大事となれば、纖弱い女でも男も及ばぬ勇氣を振ひ起すではないか。國民をして欣んで國の爲に死なせようと思へば、戰の理由を物質的利害に置かずして、國家存亡の危機を救ふといふやうな精神的理想を以てせねばならぬ。

以上述べ來つたところを綜合すれば、萬古不變の眞理は左の言葉に要約される。

凡そ世の中に、武力によらず、經濟によつて建設された國家なるものはない。國家は種族保存の本能に基づけるものであつて、唯その手段に、武力によるものと、詐術によるものとあるのみである。前者は卽ちアリアン民族の諸國であつて、後者はユダヤ人の國家である。同時に或民族又は國家が經濟に偏するときは、民族又は國家は衰へ、經濟そのものも亦衰退して、遂には他の民族又は國家の奴隷となるに至る。千古不磨の眞理とは卽ちこのことである。

世界戰爭以前に於て、ドイツが海外貿易を盛んにし、植民地を開拓し、それによつて武力を用ゐず平和のうちに世界を征服し得るものと信じて居たのは、偶々以てドイツ人が健全なる種族保存の本能

調一0113

0025

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を忘れた證左であつて、その結果はドイツの慘敗に終つたのである。

力に依つて國を築き上げて來たドイツ民族が商賈人に成り了り、徒らに難きを避けんとする儒弱もの に成り下つたことは、一見不思議なことのやうである。プロシヤの勃興は國民の武勇に依るものであつて、金融によるものでもなければ、經濟に依るものでもなかつた。ドイツ帝國と雖も、同じく武力に依つて打ち建てられたものではないか。經濟の利のみねらふは民族の墮落である。尙武のドイツ民族が商賈人に墮落するとは何事であるか。

余はドイツの同盟政策や商工政策を考ふる毎に、ドイツ民族をこの如き方向に導き去れるものの何であるかを模索した。而してその唯一の解答として余の前に提供されたものは、畢竟するにマルキシズムであつた。ドイツ民族を腐敗させたものはマルクスの教理であつた。

余は再びマルクスの本を讀み直した。今度は他人の說に左右せられず、マルクス理論とそれに基いてゐる政治、經濟各方面の實際運動とを照らし合はせ、獨自の判斷を以て讀むこととした。而して余は愈々深くマルクスの害毒を知ると共に、始めて之を打倒するの必要をも感じた。

ビスマルク公は社會民主黨打倒の爲に退去命令を發した。余は公の目的及びその結果を愼重に研究し、マルクス主義に關して余の到達せる結論の誤りに非ざることを知つた。その時以來余の持說は勁かないのである。而して余は進んでマルキシズムとユダヤ人との關係をも研究した。

嘗つてヴ・ーンに居た頃には、ドイツは堂々たる國家と思はれた。而もドイツの前途を思ふとき私は屢々言ひ知れぬ不安を感じた。私はドイツの外交政策の誤れるを論じた。而してマルキシズムは國家の憂患である。然るにドイツでは之を扱ふことが甚だ手輕であつた。多くの者は言つた、心配するに及ばぬよ、マルキシズムなど何でもないと。併しこの、何でもないが危いのだ。古來「何でもない」で國を失つたものが少くないのだ。ドイツひとり「何でもない」で亡びない道理がない。

一九一三年から一四年にかけて、余は屢々マルキシズムの危險を說き、打倒マルキシズムはドイツ今後の重大問題である、と叫んだ。

マルキシズムはあらゆる方面に害毒を及ぼした。ドイツの誤れる同盟政策の如きも畢竟その一であるが、之尙言ふに足らぬ。マルキシズムの恐るべきは、國家又は經濟に關する國民の思想を墮落せしめたことである。尙武の國民が算盤の國民となつたことである。

ドイツ人は戰爭前から心が腐りかけて居た。唯その心を腐らせるものの何であるかを自覺しなかつたばかりだ。病を治すのには、病源をつかむことが先決問題だ。本を知らずして末を抑えんとしても駄目だ。ドイツ國民の精神的墮落はマルキシズムの病源に依るものである。而も人々は之を悟らなかつたが故に、マルキシズムに對する處置も疎かであつたのは千古の恨事である。

調一0113

0026

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第二章　新三國同盟論

一、外交の本義

戰前に於けるドイツの同盟政策相手は間違つて居た。然るにそれが戰後になつても毫も改まることなく反つて甚だしくなつた傾きがある。蓋し戰前の外交の誤つて居たのは政府當局の迂濶無能に基因せるものであるが、戰後の外交の誤りは革命のドサクサ紛れに舞臺に現はれて來た賣國奴的似而非政治家の惡戯に基くものである。同盟にはいろ〳〵の相手がある。而してその中には惡いものもあればドイツ國民にとりて眞に良いものもある。然るに共和政府當局はそんな良い相手を欣ばなかつた。我等の欲する眞の同盟はドイツ國民の大きな解放運動を伴ふものである。而もこの如き解放運動は必然に國家主義又は國民主義の擡頭を意味するが故に國民の覺醒を恐れ、同時にドイツ經濟の復興と獨立を欲せざる政府は殊更に之を排斥したのである。これ卽ち、共和政府外交の無爲にして日を徒消せる所以であつて、彼等が進んで國家に有利なる外交の相手を求むるを避けしは、要するに寄生虫たる彼等が、久しく自己の地位を維持せんが爲に他ならぬ。國民は政府のこの如き不しだらを默視して居るべきではなかつた。實際國民のうちには既に氣付いて居たものもあつたが、或者は表面に起つて反對

するだけの氣力がなく、徒らに盲從して居たのである。

我がナチス黨にありては最初專ら內政の改革に力を用ゐ、外交には比較的注意を向けなかつた。我等の見解に依れば外交の成功には先づ國內の刷新を必要とする。內に國力の充實があつて始めて外に國威の發揚がある。殊にドイツの如く世界の政治ゴロが革命のドサクサに乘じて國內に紛れ込み、恐るべき陰謀を果しつゝあるところに於ては、第一にそれ等の有害分子を除き去るの必要がある。何となれば、一九一八年の悲劇も要するに彼等一味の放火に過ぎなかつたのである。之卽ち、我がナチス運動がさしあたり內政を第一とし、外交を第二に置いた所以である。

併しながら黨の規模が漸次大きくなり、內政運動も漸く整頓するにつれて、黨としても外交政策を決定せねばならなくなつた。之は黨內に對してのみならず、一般に外交知識の乏しい國民大衆にとりても、必要缺くべからざることとなつて來たのだ。

外交の方針は國民の現在及將來にとりていかに有益であるかに依つて決定する。政治の目的は畢竟國民の福祉にあるが如く、外交の目的も亦國民の利害以外には何ものもない。國民に有益か否か、之が外交を決定する唯一の標準である。

二、明日の獨立

調一0113

0027

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

大戰以前の外交も、國民及國民の子孫の爲に生存の糧を確保すべく、之が爲に利害を同うする他の國を求めて同盟したのであることには疑がない。外交はどこまでもその方針で行くべきだが、今日は事情が聊か變つて居る。戰前のドイツは押しも押されもせぬ獨立の國家であつて、專ら國民の生存確保に努むれば足りたのであるが、現下のドイツには先づ國家の獨立がない。從つて我等は第一に國家の獨立を恢復せねばならぬ。而して外交の目的も差當りはそこに置かれねばならぬ。他の語を以て之を云へば、ドイツ當面の外交は、明日の獨立を確保すべき準備工作でなければならぬ。

之に就いて注意すべきは、國家の獨立を恢復する外交工作に於てはドイツの本國を中心とし、本國が先づ獨立の精神に燃え且實現すべき軍備を有するに至るを必要とする。喪はれた地方は暫くその儘にして置く。出來もしない合同を急いで共に苦しまんよりは、本國が獨立をとり戻して徐に分離された地方を回收するの優れるに如かぬ。奪はれた地方の回收は畢竟本國の國力の恢復の問題である。本國の獨立は主であつて、割讓地方の回收は從である。割讓地方の恢復には本國の武力恢復が先行せねばならぬこと言ふまでもない。

大戰に依りてドイツより割取された地方は、住民口頭のプロテストに依つて合併を許されるものでない。彼と我等との間をさいていつまでも一つにさせまいといふのが敵國の濫らざる意思である。之を打破して再び一つになるのは只物言ふ銃劍の力に依るべきのみである。本國の務はこの劍を鍛へることである。而も我等が劍を鍛へんとすれば、必ず之を阻止せんとする國が出て來るに相違ない。そんな國を掣肘する爲に利害を同うする他の國を求め、之と同盟を策するのが外交である。

三、誤れる舊三國同盟

余は嘗つて戰前に於ける我が同盟政策の誤れる所以を指摘した。惟ふに我が國家の前途と、國民の爲に食料を確保すべき方法とは凡そ四つある。而して戰前の我が外交はそのうち最も悪いくじを抽いたのだ。ドイツは歐羅巴大陸に於て領土を擴張し、そこに國民安住の地を創るべきであつた。然るに當時のベルリン外交は大陸發展政策を捨てて植民地に發展し、併せて對外貿易に依りて國を樹つべき方針を定めた。彼等は同時に之に依りて他國との衝突を避け得べしと考へたのである。而もこの期待の全然誤りであつたことは、世界戰爭に於て明かに立證せられた。

ドイツは歐大陸に於て領土を擴張し、そこに國民永遠の基礎を固むべきであつた。之卽ち、余がドイツ外交の進むべき唯一の方策として推奬せるものである。之でなければドイツの發展はないのだ。而してドイツが當時既にこの政策を實行したならば、植民地の如きは期せずして自ら我等の手に歸したのである。

右の政策はイギリスと同盟しなければ實現が出來ないものである。單獨でならば、ドイツがまづ四

調一0113

0028

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五十年間一切の文化事業を打捨て、軍備に專念して恐しく大きな攻擊力を擁する必要がある。それでなければ實現が出來ない。四五十年も文化を抛擲して置くと云つたら定めて氣の小さいものは膽を潰すであらうが、それ程驚くべきことでも何でもない。凡そ一國の文化なるものも國家に獨立と自由とがあつてのことだ。國家自ら他の屬領のやうになつては何の文化ぞやだ。されば國家獨立の爲にはいかなる犧牲も大に過ぐるとなすことは出來ぬ。文化の遲れの如きは國家が發展さへすれば後に至つていくらでもとり返せる。加之、戰爭の後にはいつでも文化の花が咲き出るものだ。故に我等は文化の盛んならざるを憂べずして、戰備の足らざるを憂ふべきだ。戰ふ時には戰に全力を集中する。さうすればいやと言つても文化はあとから復興して來る。ギリシャではペルシャ戰爭の後にペリクリスの文化時代があり、ローマではピューニック戰爭を經て始めて世界的な文化の發展を見た。

さりながらあらゆる文化を犧牲として、國民の全力を軍備に用ゐるといふが如き思ひ切つた大仕事は、頭の惡い、か弱い今日の政黨者流には思ひ及ばぬことだ。フレドリック大王のやうな不世出の元首にして始めて出來ることだ。議會政治だとか、民主主義などと騒いて居るユダヤ的政治家には望んでも無駄なことだ。

ドイツが戰前に徹底的な軍備充實の出來なかつたのは之等似而非政治家の妨害によるものである。而して自信のある軍備を造り上げることが出來なかつたから大陸に於て新領土を得るといふ外交を放棄して植民及商工立國政策に奔り、こゝにイギリスと衝突し、彼をして我等の敵とならしめた。然らばロシヤと同盟するかといふに、それもなさずして、最もわるい相手であるオーストリと同盟し、之が爲に遂に世界戰爭にまで捲き込まれて了つたのだ。

四、現下の歐羅巴

さりながら戰前の外交は誤つて居つたと言つても、兎に角何方針らしいものがあつた。植民地に發展し、商工立國で貿易を盛んにやつて行く。間違つて居ても一つの外交には相違ない。然るに現下のドイツ外交は全く外交でない。目を皿にして見てもベルリン外交のラインといつたやうなものは何にも見當らぬ。

歐羅巴の外交は大約次の如きものである。最近三百年の歐羅巴の外交史は、大陸諸國がイギリスに操られて踊つて居る歴史である。イギリスは對岸諸國を互に爭はせて置き、その間に海上を横行して世界政策を實現したのだ。

イギリスの外交は尙プロシヤの陸軍の如く國の誇りである。實にイギリスの外交とプロシヤの陸軍とは近世國際史上の双璧だ。イギリスはエリザベス女皇以來大陸に對して一貫した外交方針を持つて居る。卽ち大陸の或一國が他を凌いで大きくならうとすれば、あらゆる手段を用ゐ、武力に訴へても

調一0113

0029

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

之を掣肘することだ。その手段は時と所とに依つて同一ではないが、相手を叩く決意はいつでも衰へを見せたことがない。而して海外に於ける一般狀勢が不利であればある程イギリスは愈々大陸諸國間に爭の種子をまいた。例へばアメリカ獨立後一層大陸政策に眞劍になつたが如きである。イギリスは海に於ても陸に於ても對岸に強い國の起ることを欲しないのだ。かくて海の競爭者としてはスペイン及オランダを打破り、陸に於てはナポレオン一世を倒してフランスの覇權を覆した。之が彼の外交である。

イギリスは初めドイツを馬鹿にして居た。然るに一八七〇年ドイツが統一的の國家になるに及んで彼の態度は警戒的となつて來た。彼はドイツを以て大陸の覇權を握るものとなし、之を強くしてはならぬと考へ始めたのである。而もこの間アメリカが非常な經濟的發展を示して動もすればイギリスの地盤を犯さんとする傾向を見せ、ロシヤ亦軍備を强化して印度を危くせんとするの勢を生せる爲、イギリスはドイツに接近しようかと考へたことも幾度かあつた。而もドイツ側にそれを利用する腕がなかつた爲、彼は遂にドイツを離れ去つた。

ドイツは外國貿易に發展するを以て策の得たるものとなしたこと再三述べた通りである。經濟的に而して平和的に世界を征服し、而して全力を擧げて戰爭を避ける、之が外交方針であつた。然るにイギリスも亦同じく經濟的勢力を以て世界に雄飛せんとするもの故、兩國は必然衝突せざるを得なくなつた。イギリスは敢然起つてドイツの行く手を遮らんとし、大規模な反獨同盟をつくりはじめた。イギリス人はどこかの國の人間のやうに、當てにもならぬ世界平和などに頓着する國民でない。眼中唯一自己の世界的覇權があるばかりであり、之を維持する爲にはいかなる手段をも敢て避けない。之がイギリスである。彼は己の短所の陸軍にあることを知るが故に、苟くも陸軍らしきものを持つて居る國ならいかなる國でも同盟國として己の味方に抱き込むこととした。この如きやり方は、或は恥を知らないものだといつて批難するものもあらう。然しながら敗れると知つて居て戰ふのは無謀である。必ずや勝つべからざるをなして敵の勝つべきを待つのが戰の上乘なるものである。焦土外交は外交の本義でない。勇敢に戰つたとて、それで亡びて行くのでは意義がない。國民の生存と發展とを確保するのが國家存立の理由であつて、外交の任務はそこにありとすれば、イギリスが世界的支配確保の爲あらゆる國を利用してドイツに當らしめんとしたのは當然爲すべきことを爲したものと言はるべきだ。大戰に次で革命があり、ドイツの疲弊甚だしきに及び、イギリスは最早ドイツを警戒するの必要なしとした。革命と共にイギリスにとりて恐るべきドイツの制覇は終焉となつたと考へたのである。

さりながらドイツを全然歐羅巴の地圖より一掃するはイギリスの利とするところでない。彼の恐れはドイツが植民地を有し、而して彼と世界市場を爭ふの點にあつた。植民地を奪ひ、貿易市場からも驅逐して終へばよいのだ。それ以上ドイツを弱めるのはイギリスとしても困ることであつた。一九一八年から一九年にかけて革命ドイツは疲弊のどん底に陷つた。華やかなドイツの覇權は跡なく消えて

調一0113

0030

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

その代りにフランスが新たに大陸の覇者として現はれて來た。今度はフランスを抑へる順序だが、今やフランスは大陸唯一の陸軍勢力となつて各國を引き廻はして居る。いつもならばドイツを引き來つて掣肘させるところであるが、ドイツはのびて終つて手のつけやうがなく、ドイツの外交はどんな條件でも良いから媾和條約を結びたいといふ弱音をはいて居るのだ。流石のイギリスも之には當惑した。

凡そ國民に尊ぶところは生活意識の强烈なことである。生活意識を喪失して屈辱的媾和をも甘受せんとするに至つては、之當に國民を擧げて奴隷に墮落せるものであつて、こんな國民は他國の植民地にでもなるの他はない。イギリスと雖もドイツがこんな風では同盟したくても出來ないであらう。

イギリスはフランスの過大となるを防ぐ目的を以て、ドイツの分割に參與するの他なくなつた。

イギリスより觀れば、ドイツは敗つたが、目的は達せられなかつた。イギリスの國策は大陸に强大な國の崛起するのを防ぐにある。ドイツを倒してもその跡にフランスといふ大きな國が出來上つて見れば何の益もない。況や歐羅巴の政情は戰爭前よりも反つてイギリスに不利なものとなつて來た。

一九一四年のドイツの形勢を觀ると、東にロシヤがあり、西にフランスがある。前者はドイツよりも大きな陸軍を有し、後者はドイツに匹敵する陸軍を擁して居た。而して海にはイギリスの海軍があつていつもドイツの沿岸を壓して居た。從つて英の海軍がなくても露佛だけの陸軍で十分獨を抑へて行くことが出來た。ドイツの沿岸は英の海軍に對しては短くて狹く、反對に露及佛に對する國境は長ー過ぎて困つた。

然るに今日のフランスは戰術的に見て戰前のドイツの比でない。陸軍は大陸に於て之と對抗し得るものがない。而して南のスペイン、イタリーに對しては天然の山河が自然の防壁をなして居て心を勞する要がなく、東方ドイツは革命に依りて無力なものとなり了つた。更に海上方面に眼を轉ずれば、佛の沿岸はいつでも英の心臟部に向つて飛行機を放ち或は長距離砲を以て脅かし得るのである。それば かりではない、潛水艦は裕に英の商船を擊沈するに足る。それには大西洋岸でも地中海でも佛は安全な根據地を有して居るのだ。佛の軍事的地位はこの如く有利である。

英がドイツを倒したことは佛を助けて大陸に於ける覇制を成就させたことになつた。之を軍事的立場から見れば佛を世界第一の陸軍國たらしめ、米に對しては自己と同等の海軍力を認めねばならぬなつた。而して世界經濟の點では英の勢力範圍は擧げて舊聯合諸國に提供するといふことになつたのだ。英の外交が大陸のバルカン化を目的とするものとすれば、佛の外交はドイツ國內のバルカン化を不變の方針となすものである。

英の外交は大陸に大國の起るを防ぐにある。而してこの爲に大陸諸國を互に牽制せしめる。佛の外交はドイツを攪亂することである。それ故ドイツが大小の聯邦に分れて互に掣肘するは佛の最も望むところであつて、佛はこの間にライン左岸を占領して大陸制覇を成就する。之が佛の傳統的外交だ。

調一0113

0031

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

英と佛との外交はこの如くにして次第に相容れざるものとなりつゝある。

五、同盟の相手

以上の情勢より推して今日のドイツの爲に盟邦を求むるとすれば、英を措きて他になきを發見せん。英はドイツを苦しめた。而して今日のドイツの爲に盟邦を求むるとすれば、英を措きて他になきを發見せん。要なく、寧ろ提携して佛の覇權打倒に全力を用ゐたいところだ。之ドイツにとりて逸すべからざる好機だ。吾等は過去の怨などを云々すべきでなく、過去の經驗を利用すべきである。然らば吾人の得たる經驗とは何であるか。他でもない、防守のみを目的とする消極的な同盟は駄目だといふことである同盟ははじめから新領土を得るとか、或は領土を擴張するとかいふやうに、ともにまうかるものでなければ鞏固なるを得ない。

我が國民は外交の知識に乏しいから、新聞紙上で某國の政治家は親獨的だ、某々國の國民はドイツに親しみを持つて居ると云へば、直ちにそれ等の國と同盟が出來るやうに考へる。併しこれ程世の中に馬鹿氣たことはない。有體に云へば政治家としては英にも米にも伊にもプロ・ドイツ、則ち親獨などはあり得ないのだ。英人は畢竟英人、米人は米人、イタリー人はイタリー人であつて、プロといふ字をつけねばならぬとすれば英人はプロ・イングリッシュ、米人はプロ・アメリカン、イタリー人はプロ・イタリアンであるばかりだ。それ故にお互に好きだとか敬服して居るとかいふやうなことで同盟が出來ると思ふ者があつたら、それは驢馬だ。然らざれば口と腹との違つたうそつきだ。同盟には利害の一致がなければならぬ。それも進んで取ることあるべき積極的な利害でなければならぬ。こゝに到ると英人がプロ・イングリッシュであるだけにプロ・ドイツにならなければならぬことになる。之が同盟の基礎として尤も健全なのだ。而して巧妙なる外交家はこゝをみつけて同盟を締結する。我は彼に倚り彼は又我に倚らねばならぬ共同の利害を發見するのだ。

右の原則を目下歐羅巴に適用するとすれば、先づ次の問題を考へる必要がある。即ちドイツを中歐より除いて終へば、經濟的にも軍事的にも大陸の覇權は佛の掌中に歸せざるを得ない。之を欣ばざる國はどこであるか。更に突き進んで云へば、佛の大陸制覇を以て自國の將來を危くするものと考へる國はどこであるかと。

他方もう一つ我等の考へねばならぬことは、獨佛は不倶戴天の敵たることである。獨佛は過去もさうであつた如く、現在もさうである。ブルボン王朝たると、ジャコビンたると、ナポレオンたるとデモクラットたるとを問はず、佛の外交は國境を東へ押し進め、ラインを領内にとり込み、同時にドイツを四分五裂させて置くのがその傳統的政策だ。

英はドイツを世界の強國たらしめないのだが佛はドイツが國として存在することを欲しないのだ。

調一0113

0032

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

同じく厭だといふにも大きな相違がある。ところで我等の今日企圖してゐることは世界の强國たる地位を求めて居るのではなく、國としてのドイツの存立を爭つてゐるのだ。換言すれば祖國の存在と國家の統一と、而して後生子孫の爲にパンの地を求めて居るのだ。かく觀來れば、今のところ歐羅巴の盟邦は英伊兩國なりとの結論に達せざるを得ないであらう。

英は佛の陸軍が勢力を張つて、之を抑へるものがなくなることを欲しない。又佛が鐵、石炭の產地を握つて今後世界の經濟市場へ乘り出し、英を脅かすこともロンドン政府は反對である。一度大陸が自由になれば佛は昔日の華やかなりし時代を慕うて世界の制覇を企圖せぬとも限らぬ。之も英の警戒するところである。そればかりではない、英人はツェペリン空襲に膽を冷したものであるが、佛が强くなれば每晩でもロンドンは佛機の襲來におびえねばならない。かくて佛陸軍の優勢は大英帝國の心臟部に不斷の壓迫を加へることにもなる。

さりながら佛の强大を欣ばざるものは英ばかりでなく、伊も亦同樣の惧れを懷くものである。伊が大戰に參加したのは佛を大ならしめる爲でなく、アドリア海に於ける競爭者墺を葬る爲に過ぎなかつた。佛が今後大陸に於て異常な力を張るは、伊にとりて迷惑千萬なことである。或はいふ、佛と伊とは民族的に近い關係にあると。併しながら國際間の生存競爭に於て重きをなすものは國の利害であつて民族關係ではない。

かくて英伊兩國の利害はドイツの利害と完全に一致する。佛の過大を制するは三國の均しく希望するところである。

六、盟邦としてのドイツ

英獨伊の三國同盟については三つの觀點がある。そのうちの一はドイツ側についてのものであり、他の二つは相手國たる英伊についてである。

先づドイツのことだが、問題は今日のドイツが同盟國たるの資格ありや否やである。換言すれば他國は同盟國としてドイツを相手にしてくれるかどうかである。他國と同盟を結ばんとするものは、何等かの目的を持つて居る。而してその目的を達する仲間に同盟國を選ぶのだ。されば同盟國は己の目的を達するに當り手助けをしてくれるものでなければならぬ。然るにドイツの現狀はいかんといふに國民の大多數がデモクラシーだのマルキシズムだのと騷ぎ立てるばかりで、己の國の利害さへ放擲して顧みざるの狀態である。ドイツは國民の生存を犯されて居ても、之を防護するの勇氣さへ持たない。こんな國民と結んで共同の目的を遂行せんとする國のあらう筈はない。ドイツ政府は外に對しては屈從を事とし、內に對しては國民の志氣を抑壓するのに日も足らざる有樣である。舊三國同盟は生ける屍の如き存在であつた。新たに生るべき同盟はもつと積極的なものでなければならぬ。ドイツは

調一0113
0033
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

果してそんな積極的な同盟のメムバーたり得る資格ありや否やだ。

恐らくは今日ドイツと同盟しようといふ國はあるまい。敵から踏まれても蹴られても起つて抵抗しようともしないドイツなんだ。こんな意氣地のない國と誰が同盟など結ぶものか。抑も舊聯合國が今に至るまでドイツに對して聯合を續けて居るのも畢竟ドイツがいくぢがないからだ。聯合國のうちにはドイツのこの上の衰弱を欣ばざるものも少くないのだが、肝腎のドイツが腰を抜かして、立ち向ふ氣力をなくして居るのだから仕方がない。天は自ら助くる者を助く。自ら爲す所なき國民は助けようと思つても助けやうがない。茲に於て止むを得ず佛と一つになつてドイツをこぐちから削つて行くのだ。かうすることが佛國だけを大きくさせない唯一の方法だからだ。

第二の問題は舊聯合諸國は戰爭中惡宣傳に依つてドイツをわるい國だと大衆に思ひ込ませたのである。ドイツ人は蠻人だ、泥棒だ、獸だと言つて宣傳したものである。それ故に國民は今でもドイツ人と言へば人間でないやうに思つて居る。これは大きな誤であるが、之を正すことが容易でない。昨日までドイツ人を蠻民のやうに宣傳して來た當局が、急にドイツは良い國だ、我等の同盟國として尊重するに足る國だと掌を反すやうなことも言へないではないか。之が相手國側の難關である。

第三の問題は今後の同盟政策について最も重きをなす點である。

卽ちドイツをこの上弱めることは英の國策に反するものであるが、同じ英國のうちにドイツをもつと弱めようとするユダヤ系財閥のあることだ。この財閥は廣く國際間に根を張つて居る。かくて英の眞の利害とユダヤ財閥の利害とは正面衝突をなし、その波紋が英國の對外政策に現はれて來る。ユダヤ財閥はドイツの經濟を破壞するに止まらず、政治的にドイツを奴隷たらしめようとして居る。それが英の利益になるや否やは彼等の問ふところでない。ユダヤ人はドイツの勞働者を財閥の道具たらしめる爲に先づ政治的にドイツをボルシェヴィキ化する必要があると考へてゐる。而してドイツをボルシェヴィキ化するには、佛の軍隊が外からドイツを搖り動かすことが必要であると考へてゐる。

ユダヤ系の新聞と財閥の新聞は戰前から戰時にかけて盛んに排獨宣傳を行つたものである。その結果として何も知らぬ國まで中立を拋棄して聯合軍に加はつた。今日でもドイツを目の敵として、どこまでも倒さうとして居るのはユダヤ人であつて、苟くも排獨運動のあるところ、そこには必ずユダヤ人の魔手が動いて居る。

ユダヤ人が獨逸のボルシェヴィキ化に全力を注ぐ理由は極めて簡單である。古來の歷史が示す如く、歐羅巴の運動はいつもドイツが中心となつてゐる。ドイツをボルシェヴィキ化すれば、世界をボルシェヴィキ化し得るのだ。獨をボルシェヴィキ化するといふのは國家を念とする生粹のドイツ人を放逐して、之をユダヤ財閥の奴隷とすることであつて、ドイツをボルシェヴィキ化し得れば、ユダヤ人の世界制覇が成就するのだ。從つてドイツがボルシェヴィキ化のわなから拔け出すことは世界をボルシェヴィキ禍か

調一0113
0034
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ら解放することでもある。

ユダヤ人が戰時中のみならず戰後に迄亘つて排獨運動をやめざるは右の如き理由によるものであるが、之に依りて利を得るものはひとりユダヤ人ばかりであつて他の國民は何れも害毒を受くるのみである。凡そユダヤ人の策略は住む國に依つて異なり、同一ではない。彼等は良くその國の國民心理を理解して、それに適應した方法を案出する。則ちドイツにありてはインタナショナリズムとか、或はまた世界平和とかの運動を鼓吹し、佛にありてはショーヴィニズムを煽り、英に於ては經濟とか英帝國とかの運動を提唱する。かくてそれ〴〵の國に於て功を收め、次第に勢力を得て來るとやがては本性を現はし、その國々を喰つて終ふ。ユダヤ人の天下なるものはこの如くにして成就されんとするのである。

されば英でも佛でも本當の國民とユダヤ人とでは外交上の意見が違ふ。唯佛ではユダヤ財閥の意見とショーヴィニストたる佛人との意見が完全に一致する。之兩者ともドイツを倒すことを唯一の目的として居るからであつて、佛が獨にとりて最も危險な敵であるといふのも之が爲である。佛は歐羅巴の心臟部であるライン地方にネグロの軍隊を入れ、狼藉をほしいまゝにさせる程の國民であり、ユダヤ人は世界支配の野心を包藏する民族である。佛人のショーヴィニズムとユダヤ人の野心との結合は我々白人最大の禍害である。

佛がドイツ憎さのあまりに盲目的となり、ユダヤ人にそそのかされて今日なして居るところは、白人に對する一大罪惡であつて、他日白人から嚴しい制裁を受けねばなるまい。

佛のなすところ既に右の如しとすれば、ドイツたるものは晏如として居るわけにはゆかぬ。我等から云へば世界には氣にくはぬ國も少くない。然しながら現在の事情に於ては何れの國でも良い、我等とひとしく佛の野心を不便とし、之を打破せんとする國であつたら、文句なしに提携すべきである。而して現在のところ、英と伊とがそれだ。

七、南チロルの問題

然るに革命以來外交當局のなすところを見るにまさに右と正反對である。彼等は專ら佛に近づき、佛との提携をさへ企圖してゐる。世の中にこれ程あきれたことが又とあらうか。之も亦ユダヤ人の惡戲である。ユダヤ人はドイツが假にも佛へ接近すれば、ドイツと同盟しようと思つて居る國でも離れて行き、ドイツは遂に孤立となる。之が獨佛提携を云爲するユダヤ人のねらひどころだ。

勿論今のところ英と同盟するにもいろ〳〵の障碍があつて、無雜作にはゆかぬ。ドイツに於けるユダヤ系の新聞紙はドイツ人の排英熱を煽るに努めて居る。ドイツ海軍の再興とか、舊植民地の回收とかは彼等の好題目である。而してそれを又あちらに居る仲間のユダヤ人がとり上げて英人の排獨感情

調一0113
0035
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を刺戟する材料に轉用してゐる。こんな工合で英獨の間は次第に離れて行くばかりだ。併しながら試みに思へ、陸の地盤が相當固まつて居た戰爭以前でさへドイツの海上支配は實現出來なかつたのだ。今日の如く國内四分五裂の狀態にあつて、尙ドイツの海軍再興などを口にする者は低能兒にあらざれば白痴の徒である。

我等の敵は佛である。佛は我等の勢力を削ぐことに全力を傾注して居る。然るにユダヤ人は我が國民の目を佛より轉じて他の方向に向けさせようと試みて居る。その好適例として南チロルの問題を擧げよう。

昨今南チロルの問題について盛んに悲憤の聲が擧つて居る。併しながら聲ばかりの悲憤は役に立たぬ。抑も世界大戰に於て軍隊の一員として余が出征したのも、他の地方と同じく南チロルをも我等の手より離さない爲であつた。何となれば南チロルはヴィーンやミュンヘンの政治家のお喋りに依つてでなく、軍隊の力に依つて防護されるのである。然るに我等の奮鬪中議會の政治家とか政黨屋とかいふ者は、後から我が軍隊をつき崩したのである。そして南チロルは他へもつて行かれたのだ。南チロルを滅したものは、戰線のドイツ軍隊を裏切つた議會とその政治屋とであつた。

今となりては南チロルの回收は神頼みでも駄目だ。國際聯盟は尙更望みがない。之を回收するは唯腕だ、武力だ。而して今日の問題はその武力を有するものが誰かといふことだ。

議會で大きなことを言つて居る議員や、政黨領袖その他が遠征隊を組織して、チロルの奪回を企てるといふなら、余は欣んでその先頭を承らう。併しながら彼等は頭の上で榴彈が破裂しただけで腰を抜かす手合だ。戰など出來る筈は斷じてない。舌端で强いことを言つて居るのは、口頭の强がりで、チロルの回收されないことを承知して居るからだ。

南チロルの問題をとり上げて昨今殊更に騷ぎ立てて居る連中は、要するに獨伊の同盟を恐れ、之を妨げんとする人々である。それはユダヤ人と舊ハプスブルグ家に近い人々である。彼等は獨伊の接近に依り大ドイツの出現せんことを惧るるのである。

南チロルの放棄は斷じて我等の罪でない。罪人は他にある。一九一四年から一八年の間にあつても、戰線に立たず、從つて祖國の爲に皆て戰はなかつた者どもである。ドイツをして最後まで戰はしめなかつた者は、南チロルを放棄せるものである。一九一八年の革命を傍觀して軍隊の壞滅を默視せるものは南チロルを放棄せるものである。而して最後にヴェルサイユ、サン・ゼルマン兩條約に署名せる各派の政黨領袖こそは南チロルを放棄せるものである。南チロルは之等の人々に依りて他國の手へ渡されたのだ。

南チロルは既に處分濟なのである。今日武力を以て回收する力がないばかりでなく、チロル問題を提げて起つても全ドイツ人の血を沸き立たせることは出來ない。而も熱のない戰爭には始めから勝味

調一0113
0036
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

がない。若しこの際チロルの爲に戰爭をしようとするものがあつたら、それは政治的な大罪惡だ。外國の勢力下に呻吟するドイツ族は七百萬であつて、チロルのドイツ人は二十萬人に過ぎない。同じく同胞を解放するといふなら、もつと數も多く事情も切迫するものから手をつけるべきではないか。

ひとり外國の支配下に居るドイツ人ばかりではない。歐羅巴大陸のドイツ人は全體として危急存亡の瀬戸際に立つて居るのだ。之を救濟する途は、世界大戰に於けるが如く、神と全世界とを擧げて我等の敵となすが如き愚を避け、數多き敵のうちから最も恐るべき敵がどこの國であるかを見極め、それが極つたら全力を集中して之を倒すのだ。それが爲には他は皆一時放棄して置いても宜い。

失地を回復せんとすれば先づ母國の獨立とその武力とを確保することが肝要である。而して他國との同盟に依り之を確保するのが、ドイツ外交の當面の任務であること再三述べた通りである。

ユダヤ人一味のチロル回收運動は口頭の愛國である。我がナチスは彼等に惑はさるることなく、默して來るべき戰の準備をなすべきである。チロルの回收は殆んど感情問題である。而も感情は外交上の禁物だ。

八、ドイツの復興

余は曩に新同盟に關する三つの問題を提起した。三問題とは左の如きものであつた。

今日の獨逸はどこから觀ても弱り切つて居る。こんな國と同盟するものがどこにあるかといふこと、それが一つ。英伊が果してドイツに接近するであらうかといふのが一つ。英伊に接近の肚があつてもユダヤ人が之を妨害して接近させないやうなことがないか、それが一つ、都合三つである。

現下のドイツは疲弊の極にあるばかりでなく、その政府も毫も信賴の出來ないものであるから、何れの國と雖も現在のドイツ及びベルリン政府と手を握らうといふものはあるまい。さりながらここに考ふべきことがある。それは現在の無氣力は決してドイツ本來の姿でないことである。六年前のドイツは勇敢で愛國の念强く、犧牲的精神に富むことに於て比類がなく、四年間に亘り世界を敵として戰つたものであつて、昨今の墮落は一九一八年の革命に因るものである。而も今國民の氣力は漸く恢復の兆があり、國の爲なら生命を差し出しても惜しくないといふ青年も出て來れば、革命の跡の荒廢をものともせず、一心不亂に働いて祖國の復興を念とする人々も少くない。

この間までは聯合國から不正を加へられてもニヤ〳〵笑つて居たものだ。今日では抵抗が出來ないまでもにがい顏をしてにらみつけるやうになつた。これだけでも大きな違ひだ。

古來苛酷な媾和條約は戰敗國民の敵愾心を煽り、上下を擧げて獨立の運動に邁進させたことが度々である。ヴェルサイユ條約は古來總ての條約のうちでも最も酸辣深刻なものである。若しベルリン政府が之を利用して國民を刺戟したなら六年の歲月を待つまでもなく、ドイツ人の志氣はとくの昔に燃え上がつて居たであらうと思はれる。然るに事實は之に反し、政府は外國の梟息を伺ふのみで、國民

調—0113
0037
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の敵愾心をたきつけるどころか、反つて之を抑へることにのみ腐心して來た。ドイツ國民の無氣力はその爲だ。

ベルリン政府は敵の手先である。聯合國の代官である。こんな政府の代りに國民的の政府が成立し指導宜しきを得るに至らば、ドイツ國家は一朝にして勢力を恢復し、どこの國とでも同盟が出來る程の實力を發揮し來るであらう。

九、排獨輿論の處理

然らばドイツと同盟を結ばんとする外國側の事情は奈何、之が二番目の問題であつた。之に就て余は左の如く答へる。

今日外國に於ける排獨感情は多年の宣傳に依りて養成された根強いものであるから、之を親獨的に更めさせることは容易な業ではない。之には第一ドイツが勢力を挽回して大陸で一人前の國になる必要がある。それまではドイツを卑しむ外國人の感情は改まらない。而して政府も國民も眞に頼もしい國家國民であることを內外に立證するならば將來ドイツと同盟しようと考へる國は徐々に國內輿論の改造、卽ち對獨輿論の立て換へを考慮するに至るのである。外國の輿論を動かすには二三當局の親善演說の如きは役に立たない。外國をして安んじて同盟の決心をなさしめる爲には政府の方針が定まつて動搖することなく、國民の輿論も亦之を支持して變らないものがなければならぬ。かくの如くにしてはじめて國外に於ける排獨輿論を訂正し得るのである。

ドイツは先づ上下一致して國力挽回の決意を表示する必要がある。さうなれば外國はドイツを相手として仕事の出來る國なりと知り、進んで同盟締結の提議をなし來るであらう。

次に外國輿論を一新させることは本來非常な難事業であり、なかにはいつまで經つても改めようとしないものも少くないのであるから、苟くもドイツ側で之等の分子に排獨の口實を與ふるやうな暴措をしてはならぬ。

蓋し外國政府に於ては愈〻ドイツに接近するの肚を決め、國內の輿論を改めようとしても、昨日までドイツをわるく言つて居た當局が俄かにドイツに親しめといふやうなことは言へない。どうしても暗默の裡に之を導いて行かねばならぬから勢ひ相當の時間がかゝるし、明らさまに理由が說明されぬから、保守的の分子はいつまでもドイツに對する惡感情を捨てようとはしないであらう。ここに政府の辛抱が要る。

このことはドイツでも同樣であつて、外國に對する一部ドイツ人の認識を改めさせるのは容易ではないが、之は是非改めねばならぬ。ドイツ人のうちには今尙ドイツ海軍の復興、ドトツ植民地の回收を叫んで居るものも少くない。この二つは空想であつて實現の出來ないことがらである。然るに似而

調一0113

0038

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

非愛國者及街頭の政治家は聲を大にして絶叫する。而もそれが英國に於ける反獨分子によりて奈何に利用せられて居るかに就て全然無關心であるのは遺憾である。苟くも爲さざれば止む、爲すからには徹底的にやり遂げる必要がある。艦隊の復興、植民地の回收を唱ふる人達は、英をしてこちらの要求を承諾させる自信があるのではない。出來ないと知りつゝ口頭だけで抗議をなして居るのだ。之は極めて有害なことである。眞に爲すことあらんとする國民は徒らに八方に當り散らすが如きをなさず、多くの國のうちで俱に天を戴かざる敵國を一つ見定め、これに全力を傾注し、他は出來る限り我等の味方に引き入れるべきである。

我がナチス黨は須らく國民に對し小を捨てて大につき、力を分散せずして一の目標に集中し、我等の生存權を脅かさんとする唯一の國を目當として進むべきことを敎へねばならぬ。無論他の國に就てもしやくに觸ることが少くない。併しそれが爲に怒つて、誰彼の差別なく喰つてかゝるといふ法はない。めざす敵は一つである。

外國政府のうちにも怪しからぬものがある。併し我等の政府は奈何。彼等は外國の手先となつて祖國ドイツを賣り渡した者共ではないか。ドイツ人にして外國の政府を批難せんとせば、まづ自國政府を糺彈せねばならぬ。それが出來なくてひとり遠くから伊や英を罵つて居たのでは役に立たぬ。

以上の主張に對して反對の者が少からずあらう。併しそれが厭といふならドイツはどこでも同盟することが出來ないのだ。試みに思へ、英は植民地をとつだから同盟が出來ない。伊はチロルを奪つたから同盟が出來ない。波蘭やチェコは虫が好かぬから同盟が出來ないと云へば、歐羅巴では佛の他に同盟する國がないぢやないか。而もその佛もアルサス・ローレンを盜み去つた國でないか。

之を要するにドイツは孤立しては何にも出來ない。必ずや英伊と結ばねばならぬ。之が新三國同盟だ。而して之を成就するには、相手國たる英伊の對獨認識を改めさせるを以て先決問題とするが、我等にして舉國一致獨立恢復の決意を示し、他方英伊の反感を刺戟するが如き言動を慎しみ、排獨分子に口實を與ふるが如き愚舉を敢てせざる限り、これまでドイツをわるく言つて居たものも次第にドイツを理解するに至り、こゝに新たなる新三國同盟の結成となること多く疑を存しないであらう。

一〇、ユダヤ人の惡戯

英が我等と同盟するの決心をなしても、彼の國のユダヤ人が之を邪魔するに相違ない。ロンドン當局が良くユダヤ系の勢力を排して傳統的外交を遂行し得るや否や、之が余の提起した第三の問題であつた。

この問題は極めて複雜であつて、答も單純にゆかぬが、いづれにしても英國ともあらうものが傳統的外交をインタナショナルなユダヤ人の勢力に妨げられ、自由にならぬといふことは考へられぬ。

調一0113
0039
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

伊はユダヤ人を制する爲に手嚴しい措置を講じて居る。その一つは、祕密結社フライマウレルの禁止である。第二は非國家的な新聞の發賣禁止であり、第三はインタナショナルなマルキシズムとの絶緣である。かくてローマ政府はユダヤ人に動かさるることなく、イタリー獨自の外交を營んで居る。

英は世界のうちでも最も自由なデモクラシーの國と稱せられるところであるから、伊のやうに簡單には行かぬ。ユダヤ人は輿論なるものをうまく利用して、絶えず政府の外交を掣肘する。而も英國傳統の外交政策と別の世界の制覇を目的とするユダヤ人の外交とは、日を逐うて扞格が甚だしくなつて居る。而して最も露骨にその弊害を曝露したのは戰後に於ける英の對日外交であつた。

世界戰爭が終ると間もなく日米の衝突が目に見えて尖鋭化して來た。之には歐羅巴の列强も無頓着ではあり得なかつた。英と米とは固く血脈を同うするのである。その米國が日本と爭ふに至りては英國たるものは當然米の肩を持つべき筈である。然るに事實は反對であつた。米は嘗ての英の植民地であつた。その植民地が經濟に於ても、海軍々備に於ても母國を凌駕せんとして居るのだ。殊に英の獨占であつた世界の海が、動もすればユニオンの海たらんとするのである。この如き情勢を目にした英は心ひそかに嫉妬を感ぜずには居られなかつた。

米は無盡藏の富を有する新興の强國であるから之をやつつけるのはドイツをやつたやうに手輕には行かぬ。若し一朝兩國の間に戰端が開けたら、英單獨では相手にはなれない。ロンドン當局が最後まで日英同盟に未練を持つて居たのはこの爲であつた。日英同盟は面白くない點もあるが、米を相手として戰ふ場合を考へれば、盟邦としての日本を失ふのは、英にとりては大なる損失たること言ふまでもない。

かくてロンドン政府が日英同盟の廢棄を躊躇して居る間に、國內ユダヤ系の新聞は擧つて同盟の續に反對した。

ユダヤ新聞は一九一八年迄は打倒ドイツに全力を傾けた。ドイツを叩くは英國の利益といふよりも寧ろユダヤ人の利益であつたのだ。今や打倒日本のスローガンを掲げて猛烈な肇陣を張るのも、英國よりはユダヤ人の利害からである。英人は世界の制覇をねらひ、その英國を又ユダヤ人がねらつて居るのだ。

歐羅巴諸國にはデモクラシーとボルシェヴィズムの嵐が吹き荒んで居る。而してユダヤ人は之を以て歐羅巴はもう彼等の藥籠中にはいつたものと考へて居る。ひとり歐羅巴ばかりでなく新大陸も亦同樣である。今日米國の財閥と云へば多くはユダヤ人であつて、一億二千萬の米國は當にユダヤ金權の前に叩頭して居る狀態である。かくて今尙彼等の自由にならない國は極めて僅かである。併しながらユダヤ人の制覇は、世界を擧げて國といふ國がなくなつた時である。一つでも國家なるものが存在する以上、彼等の覇權はいつ倒壞するか判らぬ。ところで歐羅巴の諸國は既に魔術にかゝつてユダヤ人の

調一0113
0040
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

思ふやうになつたが、亞細亞に國する日本に對してはドイツやフランスや或は又英米と違つて直接に手懸りがない。ここに於て彼等の考へ出したのは英國その他をして日本を打たせることである。之即ち、英が日本との同盟に執着して居る間に、英國内に於けるユダヤ系の新聞が聲を大にして同盟廢棄を唱へ、軍閥打倒の名を以て日本攻撃に倫力を殘さざりし所以である。

ユダヤ人はかくの如く既に英國にのさばつて居るのだ。從つてジュウ征伐はロンドンから始めねばならぬ。

我等ナチスは汎くユダヤ人の禍害を指摘して各國に警戒を與へ、ユダヤ人を排除して、アリアン文化の擁護に努めねばならぬ。

第三章　獨逸の對露政策

一、ナチス外交の要諦

私がこゝに特に獨露關係を論ずるに二つの理由がある。

一、對露政策はドイツ外交の樞軸たること一つ。

二、對露政策に就てはナチス黨の内にも正確なる認識を缺くもの少からざること二つ。

右のうち第二項の理由は私にとり特に重要であつた。それはナチス運動に轉向し來れる若い人々の間には嘗ては左翼に屬し、從つて外交的見解に於てロシヤに好意を有する者が少くなかつたからである。少くともロシヤに就て先入の偏見を有するものが多かつたからである。このことはひとり左から來た人々ばかりでなかつた。唯欣ぶべきはボルシェヴィキの影響を受けて居た人々でも、どこかに健全な外交的本能といふやうなものが殘つて居て、ボルシェヴィキの奴隷にはなりきれなかつた。而して余は黨員の對露觀念を改めさせるには、この本能を利用し燃え立たせることが最も得策なりと考へた。

ナチスの對露政策を普及する爲に一番厄介なのは彼の自らインテリと稱する者どもであつた。彼等は主知主義の弊に陷り、個人としても將又國民としても、最も必要な自己保存又は生活の本能といふ

調一0113
0041
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

べき力を喪つて居た。彼等は己が聊かも知るところなきに係はらず、自ら識者を裝うて他人を上から見下だし、ひとかどの外交通を以て任じて居る。そのくせ外交の根幹をなす冷靜な思慮判斷は聊かも持ち合せて居ないのだ。然かも當今ドイツの外交を左右する者は右の如き階級の人々である。彼等はドイツ國民の眞の利害よりせずして徒らに彼等のイデオロギーを旨として外交の方針を定めんとする傾向あるが故に、余としては特に我が黨員諸君の前に彼等の誤を正し而して眞に獨逸外交の向ふべきところを指示するの必要がある。これ私が先づ我が國の運命に最も深き關係を有するロシヤ問題を捕へ出來るだけ明瞭に說明を加へんとする一つの理由である。

本論に入るに先だち尙二三の注意したきことがある。それは外の事ではない。外交とは一つの國民と他の國民との接觸關係を處理するものである。而してナチス外交の本義は次の如く要約するを得。

凡そ民族國家の外交政策なるものは國家に包容せらるる民族の生存を確保するを本義とする。從つて民族國家の外交は增加する國民と國民の住む領土との間に、自然にして健全なる調和を保たせることである。

更に土地と人口との自然にして健全なる調和とは國民が己の所屬する國だけで食つて行けることであつて、然らざるものは何百年何千年の國家的傳襲を有するものであつても健全な國家生活を營むものといふことが出來ぬ。そんな國民的生活にはいつかは破綻を生ぜざるを得ぬ。要するに土地の十分廣きものでなければ民族の獨立を確保することは出來ないのである。詳言すれば國家の獨立自由を確保せんとするには先づ領土の大なるを要する。

然らば國民の必要とする領土の大きさは何を標準として定むべきであるか。それは單に目前の必要のみから定めるわけには行かぬ。換言すれば領土が大きくて人口が多いといふだけではゆかぬ。その領土を保全するに足る政治的軍事的の條件をも具備したものでなければならぬ。

この如き領土を得てドイツ國民ははじめて國家の前途を確保し得る。一九一四年から一八年に亙る世界戰爭はドイツ民族の生存を確保するの戰であつた。而も我等の敗北に歸したのは地勢の不利なりし爲である。若しドイツが當時既に土地人口の上に於て眞の强國たるべき條件を備へて居たならば、恐らくは勝利は吾人の掌中に歸して居たであらう。

併しながら過去は追ふに益なし、必要なるは現在である。余は以下露骨に我が國勢の不備を指摘し少くとも我が黨內の諸子に警告を與へんとする。

二、地狹く人寡し

ドイツは今尙强國と稱せられる資格がない。我が軍備はヴェルサイユ條約に依つて無力なものにされた。併しながら我が國が强國の資格なしといふのはその爲ではない。假に今後軍備が强化されて戰

調一0113

0042

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

前の程度に復歸したとしても、それでドイツが強國の資格を得たとは云へない。試みに眼を擧げて周圍の諸國を見れば中には一國で大陸程の領土を有するものが少くない。その間にあつて僅かに五十萬平方キロ米の領土に踞蹲する我がドイツは、果して世界の強國と云はるべき資格があるであらうか。

單に領土といふ點のみよりすれば、一流と稱せらるる諸國に對しドイツは全然顔色なしである。英帝國の領土は地球全面の四分の一を占め、本國は單にその一首府といふ程である。その他の大國としては米國あり、ロシヤあり、支那があり、いづれもドイツの數倍乃至數十倍の領土を擁して居る。佛國も亦此の列强群中の一つであつて、廣汎なる植民地から軍隊の補充を行つて本國の防備を固めて居る。而して之も亦佛の政策がドイツに勝る所以である。

ドイツは植民地にドイツ人を送らなかつた。同時に又植民地の土人軍を歐羅巴の戰爭に用ゐようなどの考も持たなかつた。而して僅かに東阿弗利加で土人軍を編成したけれども、それは專ら植民地を防禦する爲であつて、本國防備の爲に用ゐるものではなかつた。無論一旦戰爭となれば、海上の聯絡を絶たれるから、土人軍を呼び寄せることはドイツとして不可能なことでもあつたが、假令それがないにしても、黑人の力で本國を防備しようなどとはドイツ人の考の及ばないところであつた。然るに佛國は始めから本國の補助軍として植民地土人の敎練に從事して居たのである。佛はそれだけ徹底してゐた。かくて今日の列强は領土の大に於ても人口の多い點に於ても、遙かにドイツを凌駕してゐる。

ドイツと附近の諸國との間に領土と人口の大きな不均衡が生じたのは二千年前の建國當時と今日とであるが、建國の當時は恰かもローマの崩壞時代であつたから、その機に乘じて土地を擴げて行き、間もなく均衡を恢復し得たけれども、今日は天下の形勢が定まり、周圍の諸國が益々伸びて行くばかりであつて、その間に伍して居るドイツは人口は少く、領土も乏しく、實にみじめなものである。

我等はドイツのこの憐れな姿を直視する必要がある。我等はどこまでもドイツの領土の狹きこと、人口の少きことを突き詰めて考へて見なければならぬ。さうすれば誰でも余が前に言つた通り、假令軍隊ばかり强くなつても、ドイツには尙列强の一に數へられる資格なきことを悟るであらう。

三、近代ドイツ外交の失敗

その他の點に於てもドイツは他の大國に比して著しく伍を失して居る。之從來指導宜しきを得ず、外交に確乎不動の目標がなかつた爲であり、國民が自己保存の本能を喪失して居た爲である。

我がナチスにとりては外交上の傳襲も何もあつたものではない。我等は總て先入の偏見を去り、この狹き領土より國民を解放して新しき沃野へ導いて行かねばならぬ。かくて始めてドイツ民族は他の奴隷となるべき危險を永久に除き得るのである。

凡そ領土は國民に食糧を供給するばかりでなく、軍事的政治的にも民族の前途を永遠に確保するだ

調一0113

0043

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

けの要件を備へたものでなければならぬことは屢々述べた通りである。我が黨の諸子はよくこの點を國民に徹底させると共に、世界で最も優秀な民族たるドイツ民族の歴史に鑑み、一日も早く現在のみじめな狀態より脱却することに努めねばならぬ。殊に國民各自が民族的自覺に目ざめ、犬や猫や馬を可愛がることを知つて、血を分けた同胞市民のなやましき運命に冷淡であつてはならぬ。

余はドイツ外交を以て無能無方針なりと攻撃したが、それはドイツ外交のこれまでの成績をみれば一目瞭然である。世には近代のドイツ外交は成功なりと云ふ者がある。併し余より之を見れば成功でなくて失敗である。一國進歩の跡は、その國だけを見つめて居たのではわからない。他と比較して見て始めて正確な判斷がつくのだ。この點から見ると、他國の進歩は平均がとれて居て規模も大きいが、ドイツは殊に領土と人口との點に於て進歩が遙かに他國に遲れた。ドイツ人が國家存亡の危機にはいつでも貴き犧牲を拂ふに躊躇せざる國民でありながら、國家の進歩にこの如き缺陷を殘せるは、要するに之を率ゐる外交當局の無能なりしが爲である。

四、東進の必然性

今こゝに數千年來のドイツ民族闘爭の跡を見來つて、畢竟今日何が殘つたかを檢すると、左の三つの事項である。

一、バユワール族の東部邊境開拓
二、エルベ河以東の征服
三、ボーヘンツォレルン家の打ち立てしブランデンブルグ・プロイセンが中心となつて新興ドイツが建設されたこと

右の事績はドイツ今後の外交にとりても大いに示唆となるべきものである。

以上三つの項目のうち特に前の方の二つは根本的なものであつて、之がなかつたらドイツ民族の今日がなかつたとも言へよう。何となれば之に依りドイツ民族ははじめて人口と土地との調和を得たのである。換言すれば年々增加するドイツ民族の人口は東方の拓地植民に依りて僅かに處分がついたのである。從つてこの二つはドイツ民族の歴史にとり重大な意義を有するものであるに係らず、ドイツの史家が之を閑却して、他のくだらぬ戰爭やその他のことを大々的に書き立てて居るのは遺憾である。

第三の項目に就て注目すべきはプロシヤの勃興と共に、ドイツ人の國家思想が發達し同時に鞏固な軍隊組織を持つに至つたことである。ドイツ人は多く割據主義である。それを統一して國家の體制下に一丸となしたものは即ちプロシヤの軍隊であり、ドイツ軍隊の基礎は徵兵制度である。從つて同制度の撤廢はドイツにとり存亡の大問題である。尙ドイツ人の愛國思想を涵養せるものも同じくドイツの軍隊である。

調一0113
0044
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

以上の事實は今後の外交指導に大なる參考資料となるものであり、ドイツの外交は之に依りて東方へ進出するの他なきことを敎へられる。蓋し東方を除き他の方面へ試みられた我等の進取政策は、今日まで一として成功せるものはない。

我等ナチスは戰前のドイツの外交を再び追はうとはしない。我等は我等の外交目標としてドイツの人口を收容すべき新しき土地の獲得を眼目とする。

五、領土擴張の目標

こゝに問題となるのはこの如き領土獲得の外交が道德上許さるべきや否やといふことである。之に對して余は一言なからざるを得ぬ。何となればドイツ民族の發展を主張する人々でさへ、一九一八年に失へる所を恢復しさへすればドイツ外交の使命は足れりと考へる者が少くないからである。それさへ出來たら再び協調外交に歸るべきだと彼等は考へるのである。

余は率直に言ふ、ドイツは一九一四年の國境を恢復すれば足れりとなすが如きは政治的犯罪である。何となれば戰前の國境はドイツ民族を包容するには不十分で、軍事地理的には不完全極まるものであつた。ドイツの當時の國境は熟慮の結果劃定されたものでなくて、偶然に出來た出鱈目なものであつた。されば飛躍を知らない一部の人々が、今尙戰前の國境に執着するのは時務を解せざる者である。

ドイツ人であつてそんなことを言つて居るから各國がいつまでも警戒を解かず、世界戰爭がすんでから八年も經過せるに拘らず、今に對獨聯合を繼續し、動もすれば之を强化せんとするの傾向さへある所以である。

當時の聯合諸國は何れもドイツの崩壞を利としたものである。彼等はドイツを畏るる餘り、相互間の嫉妬排擠を暫らく抑へて共同戰線を張つたのであつて、今日に至るまで尙聯合を續けて居るのも、要するにドイツの擡頭を未然に防がん爲である。

聯合國の今に至りて尙結束を解かざる理由の一つは、一部ドイツ人が一九一四年現在の國境恢復を外交目標として掲げて居るからである。何となればドイツにして舊の國境恢復をねらふ以上、迂濶に聯合を脫すれば、ドイツより襲擊されても聯合國の援助を求められない國があるからである。

舊國境恢復論者の誤謬は二つある。

一、舊國境を恢復するだけの力がドイツに缺けて居る。

二、假に國境を恢復し得るとするも、その結果は知れたものであつて、それが爲に二度と國民の血を流すだけの値打がない。

蓋し國境恢復は口舌ではない。それには多くの血を流さねばならぬ。若し聯合諸國がヴェルサイユ條約の改訂をドイツの哀訴に依つて實行するものと考へる者があつたら、それこそ白晝の夢を貪ぼる

調一0113

0045

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ものである。

それもタレーランのやうな人物でもあれば話は又別だが、殘念ながらそんな人物の持ち合せが今のドイツにはない。現在のドイツの政治家は一半は破廉恥ですれつからしで國民の利害には無頓着な連中であり、他の一半はお人よしの弱蟲である。加之、現代はヴィーン會議に比して外交の事情が一變してゐる。當時囮卓に坐して諸國の國境劃定を行つたものは王侯であつた、然らざれば王侯の左右に付する者であつたが、現在の國際關係を支配する者は陰の手であつて、世界に亙る廣汎な民族的覇制を夢みるユダヤ人こそは國際外交のリーダなのだ。ユダヤ人はドイツ國民の咽喉に辣手を擬してゐるのだ。之をはねのけるには、ドイツは擧國一致の憤起を必要とする。而してそれは必然的に血を伴ふ恐しき戰鬪であらねばならぬ。

扨て我等の前途にさやうな血戰が横はつて居るものとすれば、それだけでも我等としては豫め十分な國策を定めて置かねばならぬ。

一九一四年の舊國境はドイツにとりて有難くも何ともない。何となればあの時の國境だけでは過去の歴史を保護するに足らず、將來の安全を確保することが出來ず、國民の團結が固められるといふでもなく、食糧の供給が確實だといふでもなく、戰略的に見て不完全であり、大きさに於て列强との均衡がとれるといふわけでもない。舊國境だけでは我等と英米佛の隔りは依然として大きい。

この際唯一つ確實なことは、一九一四年の國境恢復が假に首尾良く成就したとするも、結果はその爲に國力を消盡し、次で進むべき力を失つて終ふことである。更に國境を恢復すれば世界大戰の雪辱も出來、世界の貿易市場へも再び大手が振つて出られることになるが、さうなつたらドイツ人は小成に安んじて根本の目的を忘れ去る虞がある。それが實に危險なのだ。

ナチスの外交政策はドイツ國民の爲にこの地球の上で十分なる土地を確保するにある。之がナチスの外交目標である。而してこの目標こそはドイツ國民が血を流す價値あるものである。我等はこの如くにして神と後生子孫の前に言ひ譯が立つのだ。何となればこの世に生れ落ちて來た時から人間は日日のパンを求めて永久に鬪爭すべく運命づけられて居るのだ。而して我等は與へられた才能と勇氣とに依つて必要なものを闘ひとるより他に途がないのだ。かくて我等のかちとる土地は農業に從事する我等の子孫を育成する。かくの如き政策を斷行する政治家は或は一時世の批難に遭遇すべきも、他日必ずやその功績を認めらるるであらう。

六、國境變更の原動力

世には他國の領土をねらふものを以つて神聖なる人間の權利を蹂躙するものだとほざく黄口兒がある。余は彼等が何者の尻押に依るものであるかを知らないが、彼等の行動は明かに内より國民の氣勢

調一0113

0046

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を削ぎ、之を攪亂せんとするものである。何れの國と雖も國土は國民の力に依つて確保されて居るものだ。ドイツ現在の國境が偶然のものであり、古來絶えず變化せることを知るものは他國の國境と雖も亦時勢に依つて變化するものなるを知るべきである。地球の表面は變化して止まるところがない。それと同じく國家の國境も必ずしも一定不變のものではない。國家と國家との境はもと人間が造つたものであつて、その變更も亦人間の手に依つて行はれるべきだ。

國境を廣げるものは强者であつて、廣げられる者が弱者なのだ。而してこの民族の强弱こそは國境を變更する唯一の原動力である。我等の住む現在の領土が天から落ちて來たものでなく、祖先の血に依つて確保されたものであるが如く、現在の我等に必要な領土は我等の劍に依つて獲得さるべきだ。

人或は口を開けば云ふ、必ず佛と一戰を交へねばならぬと。獨佛の爭は免かれないところであらう。さりながら佛國と戰ふのは我等の目的でなくて手段である。我等は歐羅巴の他のところに於て民族の發展に必要なる領土を獲得せねばならぬ。この目的を達する上に於て佛國と干戈を交へることも必要となるのだ。

七、地續きを必要とす

我等の求むるところは海外の植民地でない。現在の我が領土に隣接し之を併合すればドイツの領土が一朝にして大きくなり、新領土へ移住するものもドイツ本國と離れることなく、土地續きに祖國に結合し得るやうな地方を必要とするのである。これこそ意義ある民族的運動で我等の血は須らくこの如き運動に捧げらるべきである。我等は先づドイツ民族の運命を開拓すべきものであつて、他國の興廢の如きは多く意とするに足らぬ。殘に所謂「弱小民族の番兵」といつたやうな仕事は御免を蒙らねばならぬ。

大なる國民は大なる領土を有するに非ざれば畢竟滅亡の他なきを知る時、ドイツの領土擴張はむしろドイツ國民の義務たるを知る。殊に我等の領土擴張はアフリカ土人が領土を擴張しようといふのでなく、現代文化の生みの母である優秀なるドイツ民族の權利に基くものなるに於てをや。ドイツは世界の强國たるか然らざれば亡ぶかだ。而して强國たるにはそれにふさはしき大なる土地が必要だ。

八、東進の好機

吾等は戰前の外交を一飛びに飛び越え六百年前の外交政策に立ち返り、そこより改めて出發する必要がある。我等は歐羅巴の南部及び西部へ延びんとするドイツ民族の運動を打切り、再び東歐へ我等の視線を返す必要がある。植民地を獲たり、外國貿易に沒頭したりした戰前の外交政策を放棄して、民族の將來の爲に歐羅巴本土を獲得する新しい外交に轉向せねばならぬ。

調一0113

0047

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

然るに今日歐羅巴に於て新たな土地を得べき望みあるところと言へば、ロシヤ及びロシヤの從屬諸國より他にないのだ。

恰かも良し、ロシヤは今やボルシェヴィズムの犠牲となつて國家崩壊の危機にひんして居る。ロシヤは元來スラヴ族の政治的能力で出來上つた國ではなく、この國に於ける少數ドイツ民族の建設的能力で今日の大を致したのである。ロシヤの勢力の中心はドイツ人であつたがボルシェヴィキは之等のインテリゲンチヤを放逐したのである。ロシヤは優秀なるドイツ民族が劣等なる民族を指導して國を建てしめた一つの例であるが、他の場所に於てもこれと同じことが成し遂げられて來た。

ロシヤの上流社會がそれ等のドイツ分子に依つて形成されたこと上述の如くであるが、そのドイツ人は今や驅逐せられて之に代つたのがボルシェヴィキのユダヤ人だ。しかもロシヤ國民にはユダヤ人の政權を打倒するだけの力がなく、ユダヤ人にはロシヤの國家を永く經營して行く建設的手腕がない。かくて現在のロシヤ政權は遠からず覆沒の他はないが、現政權の沒落は卽ち同時に國家としてのロシヤの終焉なのだ。かくして史上稀に見る大きな國家的悲劇が近く我等の眼前に展開せんとしてゐる。思へば我等こそは千載一遇の好時代に生れて來たものだ。

ナチスの使命は國民にこの事實を知らしめ、ドイツの外交は華々しいアレキサンダ大王の世界征服でなく、必要な土地を得て、之を鋤で開拓して行くじみな運動であることを敎へるにある。

ナチスの右の如き政策がユダヤ人にとりて最も不便なものであることはいふを俟たない。實はユダヤ人がナチス政權に反對するのも之が爲であつて、彼等の狼狽を見ただけでも國家を念とする程のドイツ人ならば、我がナチス外交の適切なる所以を悟るべき筈であるが、事實は反つてその反對なるは遺憾なことである。ひとりドイツ國權黨ばかりでなく、國家とか民族とかいふ名稱を冠して居る政黨のうちにも我が對露政策に激烈なる反對を表示するものが少くない。

九、ビスマルク外交の檢討

彼等はいつもビスマルクを引き合に出して來て反對するのだが、ビスマルクの對露政策は無意味であると同時に今日では不可能でもあり、ドイツにとりては有害でさへある。

尤もビスマルクは嘗て獨露親善を外交の要諦となしたこともある。併しそれはその時の事情によることだ。だからビスマルクは同時にイタリーに接近してオーストリを掣肘しようとした。語を代へて言へばうるさいオーストリを制する爲にイタリーと結んだのである。同じくビスマルクの外交であつたとすれば、今日に於てドイツがイタリーと結ぶのも良いとされねばなるまい。かういふと反對者は今日のイタリーは昔日のイタリーでないといふ。然らば今日のロシヤも亦ビスマルク時代のロシヤと同一でないといふべきではないか。ビスマルクには一定不變の外交政策といふものはなかつた。彼は

調一0113
0048
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

オッポチュニストであるから、後になつて己を拘束するやうな行きがゝりは斷じて造らなかつた。

されば今日我等の間で問題とすべきは、ビスマルクが昔何をしたかでなくて、ビスマルクをして今日在らしめば何をなすかである。而もこの質問に對する回答は極めて簡單であり、明瞭である。曰く、ビスマルクのやうな賢明な外交家は、斷じて崩壞に瀕せる國家と同盟するやうなことはしないと。唯それだけである。

加之、ビスマルクの念とするところは、新たに出來上つたドイツの統一國家を固むるにあつた。從つて植民地を獲得したり或は又外國貿易に依つて國力を發展させるといふ政策には自分ながら既に疑を懷いて居た。而して彼がロシヤと結んで自由に西方へ伸びんとしたのも、畢竟はドイツの國礎を鞏固にする爲であつたのだが、この策も今日ではもう行はれなくなつた。

一〇、敗殘の劣等民族

一九二〇年から二一年にかけて我がナチス運動が各方面からドイツの獨立運動を以て目せらるるに及び、あちらこちらから余の所へ接近して來るものがあつた。それは所謂被壓迫民族の志士といふものであつて、ドイツもともになつて壓迫されてゐる民族の共同戰線を張らうといふのであつた。獨立運動の志士は多くはバルカン諸國及び印度、埃及の人間であつたが、迚つて見ると何れも大言壯語するばかりで、頼もしげな者は一人もなかつた。然るに我が國民の一部はかくの如き法螺吹きの東洋人にだまされ、印度や埃及からやつて來る學生があると、彼等を以て直ちにそれ等の國の國民代表の如くに感じちやほやしたものである。ところが實際はこんな學生どもに、他國と協定を締結する權限のあるわけもなく、國民使節として取扱はれる資格もないことは明かなことであつたから、私はまづ御免を蒙つた。假に彼等が國民に依つて派遣された公然の資格ある代表者であつても、彼等の仲間に引き入れられることは面白くないばかりでなく、ドイツにとりては有害であるから、余は率直に彼等を避けた。

己に外交上一定の目標もなくて徒らに世紀末の諸國と防守同盟を結ぶが如きは愚劣極まる行爲である。ドイツはオーストリを盟邦とし又土耳古と同盟を結んでひどい目にあつた。英佛は軍事的にも商工業的にも世界の最强最富の國である。かくの如き大國の結合に對しドイツは氣息えん〳〵たる土耳古やオーストリを率ゐて血戰を試みんとしたのである。世界大戰が我等の慘敗に終つたのは當然である。然るにドイツ人はいまだに目がさめず頼りにもならない所謂被壓迫民族の合縱に依つて世界最强の國を打倒し得ると考へるに至つては笑止千萬といふばかりでなく、この如きは眞の國家の禍患である。現在のドイツは溺れたる人間の如くである。すがり得るものなら藁でもつかまんとするのである。而もそれが相當なインテリの人々だから驚く。少しでもドイツの味方になつてくれるやうなものがあれ

調一0113

0049

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ば、國際聯盟であらうと、被壓迫民族の同盟であらうと、頓着なしに飛び込んで行かうと言ふのである。

當時、卽ち同じく一九二〇年から二一年にかけてのことである。ドイツの識者の間に、英帝國の一角は印度から瓦解しかけてゐるといふやうな話が廣まつて居た。それはイカサマ師のアジア人が……間違つたら御わびをする、印度の本當の獨立の志士であつたかも知れない……歐羅巴に來て印度が今にも獨立するやうな事を吹聽して廻り、それを正直なドイツ人が丸呑にして英國恐るるに足らずとなすに至つたのである。併し大英帝國の危機なるものは、畢竟之等少數者の幻影に過ぎなかつた。

印度は英帝國の重心をなすものである。印度の喪失が英帝國にとりて奈何なる意義を有するかは英國の政治家が最も良く知つて居る。而も英國が最後の血を流しても印度を手離すまいとすることは明らかなことであつて、それをたやすく引渡すものと考へるのは世間知らずの甚だしきものである。英國は印度の種族を分けて支配して居るが、この統治方法が用をなさなくなり、相爭へる種族が團結して一丸となるか、或は英國が他國と戰つて敗れるかに非ざる限り、英國人が斷じて印度を放棄するものではない。英國のねばりの強さは世界大戰の我等のいやといふ程經驗したところである。加之、余自身から言へば印度は他國の配下にあるよりも、英國の支配を受けて居た方がドイツ人たる余には好ましい。

埃及の獨立も亦略ぼ同樣であつて、彼等の所謂聖戰なるものは英國軍隊の機關銃の前にはひと溜りもあるまい。

一度國民存亡の危機となれば、英人は最後の血を注いで悔いざる國である。之に反して被壓迫民族なるものは、いづれも半身不隨の亡國的國民である。かくの如き亡國的國家を連ねて挺でも動かぬ强い國に當らんとするが如きは寧ろ妄動と稱すべきである。余は國家の運命を民族の優劣に依つて判斷すべしとなすものである。被壓迫民族は劣等民族である。余はドイツ人をして劣等民族に加擔して彼等と運命を共にせしめるに忍びない。しかもその誤をロシヤに對して犯さんとして居るものがあるのだ。今日のロシヤはユダヤ人のロシヤである。ユダヤ人のロシヤはドイツの獨立運動にとり斷じて同盟國たり得ないものである。之を軍事的立場から見るに、ドイツとロシヤが一になつて西歐と戰爭を始めるとするに、その場合戰場となる所はドイツばかりであるのみならず、ロシヤからは有力な援助を期待することが出來ぬ。これ一つ。ドイツの軍備は不完全で西方からの攻擊に對して國境を守ることが出來ず、ラインの工業地帶は直ちに英佛聯合軍の攻擊にさらされる。これ二つ。獨露兩國の中間には佛の與國である波蘭があるから、ロシヤがドイツに軍隊を送る爲には、それ以前に波蘭を征服しなければならぬ。これ三つ。ドイツがロシヤに期待すべきことは軍隊よりも軍需品である。卽ち技術的武裝であるが、實際はあべこべに獨逸からロシヤに軍需品を提供しなければならなくなるであら

調一0113

0050

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

う。世界戰爭ではドイツだけが兵器軍需品の供給者にされ、造つた大砲や彈丸は片つ端からオーストリヤ土耳古へ持ち去られたものだ。次の世界大戰は機械化部隊の圍である。然るにドイツに器材を提供しようといふロシヤには、今尙工場らしい工場さへなく、自動車一臺完全に造れない狀態なりとすれば、獨露同盟の價値や知るべきのみ。

一一、獨露同盟是非

獨露同盟を締結すればドイツは殆んど亡滅に陷るであらう。假に亡滅を免かれて僅かに存續するを得るとしてその結果はいかんといふに、ドイツは多量の出血に依り再起の力を失ひ、周圍の諸國は更に勢力を加へて益々ドイツを壓迫することにならう。

或は言ふ、ロシヤと提携したとて必ずしも西歐と戰爭せねばならぬといふことはない。又假に戰爭が避けられないものならば、徐ろに十分の準備をすれば宜いではないかと。併しさうは行かぬ。同盟は既に戰爭を豫定する。戰爭の意志がなくて他國と同盟するなどは無意味なことだ。苟くも同盟を結ぶ以上、心の奥の深いところに戰爭を豫期して居るに相違ない。第三國も亦さう解するのは當然である。ところでドイツとロシヤとの同盟條約が紙上の裝飾に過ぎないものとすれば實際の役には立たないし、條約の明文通りに運用されるものとしたら、英佛は手を束ねて獨露に戰爭準備の出來るのを待つ筈はない。恐らくは同盟成立後十年を出でざるうちに攻擊の火蓋を切り獨露に準備の暇を與へないに相違ない。さればドイツがロシヤと條約を締結する時は、卽ち英佛がドイツを打倒する時である。加之ロシヤに就ては尙考ふべきことが少からずある。

一、同盟條約を締結しても、今日のロシヤ政府には、條約履行の誠意ありと考へられない。

ロシヤの現政權は血に汚れた犯罪者であり、世界大戰の慘禍に乘じ、他の國をさん奪してその國の指導階級を殺りやくしてから十年、史上空前の慘酷な政治を行つて居るのである。元來ユダヤ民族は深刻な性質を有し、嘘がうまくて、その上世界制覇の野心を包藏するものである。而してモスコー政權は當にそのユダヤ人なのだ。ユダヤ人のロシヤはドイツを同盟國にしようなどとは考へて居らぬ。彼等の目的とするところはドイツを第二のロシヤ化することである。我等は斯の如き危險な相手と同盟を締結して宜からうか。ユダヤ人には條約の神聖など眼中にない。彼等は信義の念などは藥にしたくてもない。彼等は盜賊だ。かつぱらひだ。追はぎだ。こんな手合と條約を締結するほど危險なことはない。

二、ロシヤは既にボルシェヴィズムの餌食となつた。ドイツのボルシェヴィキ禍はこれからである。或者は言ふ、ボルシェヴィキはドイツに這入つて來る虞はないと。誠にお目出度いことだ。

アングロサクソンは、世界を支配するを以て理想として居る。而して彼等には彼等の手段があ

調一0113
0051
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る。ユダヤ人も亦世界制覇を目標としてゐる。

而して同じく之を實現する手段を有してゐる。併しそれは欺瞞と中傷とざんぶとであつて、窮かに他の民族の體内に喰込み、血を吸つて之を倒さねば止まぬ。ボルシェヴィズムは世界制覇を旗印とするユダヤ人の二十世紀に於ける大陰謀である。蓋し支配慾はユダヤ人の先天的特質であつて、之を打破し制止するには外部より大きな力を加へるか、或はユダヤ人自らが滅亡し去るを待つの他はない。ところでユダヤ人でなくても、苟くも外に向つて勢威を張らうといふ程の民族ならば、道德的抑制に依りて野心を抑制するといふやうなことは斷じて爲さない。野心を放棄させるには外から力を加ふるばかりである。

ボルシェヴィズムの現在ねらつて居るのはドイツである。かくてボルシェヴィズムは毒蛇である。この毒蛇の牙より我がドイツ國民を解放するには非常な努力を必要とする。而して我等はそれに依つて解放された國民の力を他に向け、國家百年の大計を成就し、この次に世界大戰があつても同じやうな慘敗を繰り返さざらんとするものである。

ユダヤ人が既に不倶戴天の敵なりとすればその人々を政府の首腦に据ゑてゐるロシヤと同盟が出來るか。ドイツがロシヤと同盟するはベルリンの政治家がボルシェヴィキの代表者を承認することだ。而して一度國家の指導者がボルシェヴィキを承認すれば大衆のボルシェヴィキ化を批難することは不可能とならう。

ドイツが飽く迄ボルシェヴィキと闘ふつもりなら、先づソヴィエト・ロシヤとの關係を清算せねばならぬ。然るに今尙我等の間に獨露同盟を可とする者の多きは遺憾である。

戰前のドイツ外交は間違だらけであつた。その同盟政策も失敗であつたし、平和に戀々として左顧右べんいつも機を失して居たことも大きな失敗であつた。併し唯一つのとりえはロシヤと手を切つたことだ。

余は戰前から考へて居た、ドイツは馬鹿げた植民政策を捨て、商船や軍艦の建造に夢中にならず、寧ろそれをも捨てて英國と同盟し、以てロシヤを分割すべきであると。余は之を以て尤も適當なドイツの大陸政策となした。

當時のロシヤはパン・スラヴ主義が盛んな時であつた。ロシヤはその勢を頼んでいつもドイツを脅迫した。ロシヤは度々動員の演習をやつた。その唯一の目的もドイツを縮み上らせる爲であつた。ロシヤの輿論がドイツを目の敵として居たことも忘れ難い厭な記憶である。新聞紙も亦盛んに排獨親佛の熱を煽つたものだ。それにしてもあの時ならば未だ英と結んでロシヤに當るといふ政策の他に、ロシヤと結んで英國に當るといふ術もないではなかつた。併し今日ロシヤとの提携は絶對に有り得ない。

調一0113

0052

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一二、東方政策の一手

時計の針はもう引きもどすことが出來ぬ。ドイツ國民も最後の肚を定めるべき時が來たのだ。列强の國の基礎は固まりつつある。ここで古きドイツに新しき元氣を附與するものは東方政策ばかりだ。かくて、我等の手に依りて遂に東方政策を實現する時が來たならば、一九一八年の悲劇はドイツにとりて反つて多大の恩惠をもたらせしものと云ひ得るであらう。ドイツはロシヤに伸ぶることに依り英國の今日所有する所、ロシヤの昨日まで所有せし所を得て、外交上でも不動の方針を持續し得るであらう。然らばドイツ外交の根本方針とは奈何。曰く、ドイツと肩を較べるやうな國を歐羅巴に存在せしめてはならぬ。若しドイツの隣境にドイツに等しき陸軍國を作らんとする者があつたら、あらゆる手段を講じ、武力に訴へても之を妨害せねばならぬ。又既にかかる國が存在する場合には、之を打倒しなければならぬ。次にドイツの國本は植民地でなくて歐羅巴大陸の土地である。現在のみならず今後數百年に亘り、農民の子弟が己の土地といふべきものを各自が持つやうにならざる限り、ドイツの國礎は安全なりとは云ひ得ぬ。而して自ら耕すべき土地を要求する程神聖な權利はなく、又その土地を求めてその爲に流す犧牲の血程貴きものはない。

一三、英・獨・伊新三國同盟

現下のドイツにとりて同盟國として選擇すべきものありとすれば、英伊の兩國に如くはない。今試みに英、獨、伊三國同盟の軍事的利益を指摘するであらう。

三國同盟の軍事的效果の第一として擧ぐべきは、該同盟が直ちに戰爭を誘發する虞なきことである。何となればいかに强がりの佛國でも、三國の提携に對しては手出しが出來ないからである。我等の世界大戰で苦しめられたのは英、佛、伊の三國協商である。然るに英、獨、伊の同盟と共に舊三國協商は瓦解して佛國は歐洲に於て孤立に陷るのである。かくて大陸の覇制が佛國の手を離れて英、獨、伊同盟の手に歸することは、ドイツにとりて先づ有利なものの一つである。

英伊と同盟すれば我が國境は腹背とも盟邦の掩護を受けることが出來、同時に盟邦に食料及び原料の供給を受くることが出來る。之も同盟の大なる利益である。

世界大戰ではドイツはオーストリや土古耳から兵器軍需品をもつて行かれたばかりである。然るに新三國同盟所屬の國は何れも兵器軍需品の製造能力の最も豐かな國々であり、ドイツは十分に盟邦から軍需品の供給を受けることが出來る。之も同盟の見逃すべからざる利益であらう。

英は世界第一の强國であり、伊は元氣な新興國家である。この如き國々との結合は生ける屍にも似た土耳古やオーストリの同盟とは、比較にならぬ程軍事的にも强い働きをなすこと敢て余の說明を俟つまでもあるまい。

調一0113
0053
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

新三國同盟の締結は容易な業ではない。併し英、佛、伊の三國協商だつて始めは出來さうにもなかつたのだ。協商は或點に於て英國の本來の利益に適合したものではなく、寧ろ大體から言つて英國は損であつたのだ。それにも係らず、エドワード七世の手腕に依つて首尾よく造り上げられたとすれば、我等と雖も新同盟の計畫を物にすることが出來ない道理はない。時恰かもドイツは從來の外交を清算して國際舞臺に一新機軸を出さんとする時である。ドイツ側で自制し且相當の犧牲を拂ふ決心さへあれば、英、伊との同盟の成らざるを憂へない。ドイツの外交は西や南と迷ふことなく、一路東方へ進出し、そこに國民の必要とする土地を確保するにあるが、佛國は我等の強大なることを恐れ、百方妨害をなすが故に、大陸に於ける佛の覇權を打破する爲には、いしあたりどんな犧牲をも辭すべきではない。同時に佛の覇制を不便とするものは何れの國たるを問はず我等の盟邦たるべきである。

第四章　獨逸と佛蘭西

一、自業自得

一九一八年十一月の休戰はドイツにとり未曾有の屈辱的なものであつた。古來の歴史に徴するも、未だ戰ひ得る餘力を有しながら、一旦兵器を投げ出して降伏すれば、次で再び起つて戰ふの勇氣を喪ひ、終には屈伏復屈伏、底止するところなきに至るを常とする。之極めて自然の成行であつて、勝者は一度でなく徐々に獲物を奪ひ去るを便とし、既に降伏の屈辱を敢てせる敗者は、小なる屈辱を忍ぶに躊躇せざるが故である。

降伏すべからざる時に降服し、それに依つて國を失ひたるものの適例にカルセージがある。クラウゼヴィツも亦國民の卑屈を難じ、降伏は歴史に拭ふべからざるの汚點を印し、永く國民の元氣を消磨せしめる、故に徒らに降伏せんよりは寧ろ戰つて倒るべきであるとなした。

戰つて倒るるものはやがて再び起つの力を回復するであらう。恰かも伐り倒された樹から新しい芽の生するやうに、と言つたクラウゼヴィツの教訓は去精された人々の耳へは入るまい。さうでなかつたらドイツ國民は今日のやうな悲慘な境遇に陷る筈がない。

調一0113
0054
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一九一八年以來我國は朝野を擧げて敵の憐みを乞ふのみでないか。拜み倒しが唯一の政治だと心得る風が國内に瀰漫して居るのだ。而して之專らベルリン政府内にユダヤ人が頑張つて居る爲である。

彼等はかくしてドイツ國民を亡滅の淵に陷れんとして居るのだ。彼等に欺かれて醒めることを知ない一般國民こそ良い面の皮だ。

休戰以來のドイツ外交は世界的陰謀を目論むユダヤ人の犧牲となりつゝある。プロシヤが一八〇六年の戰敗から一八一三年の大勝に轉ずるまで、その間僅かに六七年の日數を經過せるに過ぎぬ。現在のドイツは同じ年限を經過せるに係らず、國民は益々氣力を失ふのみである。ユダヤ人の陰謀家が國家樞要の地位を占めて國民を麻醉させて居るからである。

一九一八年の十一月から七年を經過して、その間に何が爲されたかを問へば、それは唯ロカルノ條約あるのみだ。

本文のはじめに述べた如く、聯合國は一時に大きな要求を出さずして、小さな要求を幾度にも出して、ドイツ國民を刺戟しないやうに努めて居る。その結果我が國民は不知不識の間に奴隷の域に沈淪してゐる。一度降伏したドイツが奴隷の取扱を受け、政治的自由を奪はれ、經濟的に搾取されるのは當然だが、國民の神經が既に麻痺して屈辱を屈辱とせず、ドーズ案を有難がり、ロカルノ條約を歡迎するに至つては沙汰の限りだ。然しながら人は欺くべく、天は欺くべからず。ドーズ案は良い、ロカルノ條約は良いと言つても、事實において國家の窮狀がそれ以來募るばかりなるを如何せんやだ。兩協定締結後のドイツの道連れは貧乏であり、唯一の仲間は患難である。之もみづから好んで他の奴隷たるに甘んじた國民の自業自得とでも言ふのであらう。

二、フランスの狙ひ

ドイツの情勢この如く非なるものあるに係らず、偶々警告を發する者があれば政府は百方之に壓迫を加へた。今日亞閥にありて福を利かす輩はエタイの知れぬ成り上り者だ。彼等が廟堂の上に大あぐらをかいて國民をあごの先であしらつて居るのを見ると腹が立つ。

佛のドイツ處分案は始から定まつて居る。それ故に媾和條約が締結されてからも、佛のドイツを追擊する手は毫も緩められない。之あればこそ戰つたのだ。それでなければ、さなきだに人口減少のフランスが國民を四年半も戰線に立たせるものか。佛國は戰場で多少の犧牲を拂つても、あとの賠償でウントとドイツを搾めれば、埋め合せがつくと肚をすえて居たのだ。戰つたのはひとりアルサス・ロレン二州の爲ばかりでない。佛國にはもつと深刻な目的があつた。それは戰勝に依つてドイツを小さい邦々に分裂させることである。さりながらドイツの小邦分裂は所謂ドイツのバルカン化である。而してドイツのバルカン化はユダヤ人の豫て企圖せるところなるが故にドイツを分裂させる爲に戰つ

調一0113
0055
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た佛は、ユダヤ人の手先となつて働いたことになつたのだ。之を解せざる佛人は憐むべきだ。

世界大戰の際には佛は開戰と共に東方に兵を進め、ドイツを戰場として戰ふ豫定であつた。若しこの作戰が實現したら、佛の企圖の如く、獨は戰後を俟たず、戰時中より既に小邦分立の狀態に陷つたであらうと思はれる。試みに思へ、世界大戰がソンム、フランダ、アルトワ、ワルシャウ、ニジニ・ノウゴロッド、コウノ、リガの戰線に行はれずして、ドイツ國内のルール、マインツ、エルベ、ハノワ、ライプチッヒ、ニュールンベルグの各地で行はれたとせよ、その結果や知るべきのみ。佛は昔から中央集權で固まつて居る國であるから、外國軍の侵入を受けでも國内の分裂する虞は少いが、聯邦組織のドイツでは一度國内へ外國軍を入れたら忽ち四分五裂となつたであらう。ドイツがこの禍を免かれてバルカンにならなかつたのは、我が軍隊が敵を一歩も國内へ踏み入れしめなかつた爲である。

かくて佛の策戰は最初に於てそごした。而してドイツは、一九一八年に急に倒壞したとはいふものの、當時尙ドイツ軍隊は外國を占領して居た。從つて佛としては取敢ずドイツ軍を佛白兩國より追ひ出すことが急務であつた。一度獨兵の武裝を解除すれば、それからあとは又自ら方法があるのだ。又英としては既にドイツの海軍を亡ぼし、植民地を奪ひ、貿易を破壞した以上それで戰爭の目的は達せられたのだ。それ以上にドイツを苦しめることは不必要であるばかりでなく、ドイツを弱め過ぎることは英の利とするところでない。何となれば獨の弱は佛の强だ。英は佛の大き過ぎることを欲しない。

かくて英にはこの上ドイツを叩く肚はなく、而して佛には單獨でドイツに當る力がなかつた。それ故に佛は休戰條約、媾和條約でひと先づ戰爭の局を結び、ドイツ分裂策は媾和後に於て徐々に之を實現するの策を立てた。クレマンソーが平和は戰爭の續きであると言つたのはこの意味である。

三、獨佛危機の絶頂

爾來佛は機會ある毎にドイツの國礎を掘り動かすに努めて居る。獨は軍備と經濟との兩方面から佛に攻め立てられ、國民の生活は困難となり行くのみである。若しこのまゝで十年乃至二十年も經つたら、どんな强い國民でもヘタバルの他はあるまい。而してこれが佛國外交の始めからのねらひどころであつた。

惟ふにドイツは遲くとも一九二二年から三年の春にかけて佛の禍心を看破すべき筈であつた。而してそれを看破したとすればそれに處するの途は二つあるばかりだ。己を捨てて言ふが儘に佛の自由になることが一つ、斷乎として獨立の肚を定めることが一つ、この他に道がないのだ。後者は無論國を賭しての冒險である。從つて之には先づ各國を味方に引きつけ、佛を外交的孤立に陷れることが必要である。

余は佛の禍心がいつか改まる日があるものとは信じない。ドイツはどうしても佛と一戰するの他は

調一0113
0056
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ないのだ。佛國がドイツを弱めることに、全力を傾注して餘すところなきは無理のないことだ。假に佛人であつて而して國の將來を思ふものならば、余とてもクレマンソーたらざるを得まいと思ふ。佛の人口減少は數のみならず、國民の內でも最も優秀な層の人間が滅じて行くのだ。かくの如き狀態にある佛國が今後も尙大陸に覇を稱せんとすれば、ドイツを弱くして置くより他に途がない。佛の外交にいろ〳〵の曲折があつても畢竟するにドイツを弱めることに歸着するのだ。ところで巴里の外交がドイツを弱めるにありとして、我等は用心してわなにかゝらぬやうにして居さへすればそれでよいかと言ふに決してさうでない。人間は受け身に終始しては旦に一城を拔かれ、夕に一塞を奪はれて揮の浦に行きつくのが最後の運命だ。守らんとする者は先づ攻めなければならぬ。ドイツは古來防禦的立場のみを守つて居た爲に、十二世紀以來國境は縮少するのみである。攻擊は最善の防禦だ。

この道理が國民に徹底して始めて佛と雌雄を決するの肚も出來て來るのだ。而して一度干戈を交へる以上、再び起つことの出來ないやうに佛國を徹底的に叩きつける必要がある。但し我等の目的は佛國を分割することではない。佛をして我等の仕事の邪魔をさせないやうにその手足を縛つて置くばかりであつて、佛國膺懲は畢竟手段であつて目的ではない。土地を擴げるのは自ら他の方面にある。現今歐羅巴には八千萬のドイツ人が居る。他日ロシヤを併合してそこにドイツ人が伸びて行くやうになれば、恐らく百年出でずして獨逸人の數は二億五千萬人を突破するであらう。而も今日の如く苦力のやうにゴロ〳〵して居るのではなく、勞働者と農民ののんびりした生活が營まれ得るのだ。

願れば一九二二年十二月は獨佛危機の頂上であつた。佛は賠償支拂遲延を名としてルールに兵を入れたのである。ルールはドイツ經濟の神經中樞である。而してドイツ國民は「頑固」な奴原である。佛は膺懲の爲に頑固な奴原の神經中樞にメスを突込んだのだ。而して經濟的死命を制しなければドイツ人は賠償金を出さぬと言つた。こゝに於てかどこまでも耐へ切るか、始めから當つて碎けるか、ドイツとしては二つしかないのだ。而してドイツは當然後者をとるべきであつた。然るに懦弱なる政府はこゝに出づる能はず、一度耐へんとして耐へきれず、中途から見苦しくも降伏して終つた。

四、ルール侵入

ルール占領は國民にとり望んでも得られぬ再起の機會であつた。壓制は獨立を生み、艱難から恩惠が生れる。佛のルール占領は英國に始めて對佛警戒の念を生ぜしめた。英が同盟を結んだのは必ずしも佛の好む爲でなくて、利害の爲であつた。それ故に同盟締結後に於ても英の政府筋はいつも佛に對して氣を許さなかつた。されば今佛のルールを占領するに及んで、ダウニング・ストリートの諸卿先づ眉をひそめ國民の感情亦面白からぬものとなつた。ひとり政府及び民衆のみならず、英國實業界も亦不快の目を以て佛の擧措を眺めた。大陸に於ける佛の軍備は今や獨歩の地位にある。アルサス・ロ

調一0113
0057
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ーレンは世界最大の鐵鑛の一であり、ルールは優秀なる石炭の埋藏地である。既に武力に於て覇者の地位を占めた佛は、世界最大の鐵鑛と最大の炭鑛を手にして世界經濟界に飛躍せんとするのである。

英國のみならず、伊の對佛輿論も亦ルール占領を機として少からず惡化した。戰爭の終頃から伊人は既に佛に對して良い感じを持つて居なかつたが、未だ露骨にそれを現はすことがなかつた。然るにルールの占領の事あるに及んで、伊國の對佛惡感は大びらとなつた。かくて聯合國の內紛は漸く露骨となり來つた。第二バルカン戰爭では、始め馬を竝べて戰つた國が終には常に干戈を交へる敵となつた。ルール占領を契機として爭ひ初めた聯合國はまさに第二バルカン戰爭の半島諸國になりかけた。而も睨み合に終り、分裂までに行かなかつたのは、諸國に禮讓の德があつた爲でなくて、ドイツにエンヴェル・パシャが居なかつた爲である。

ひとり外交上のみならず、佛のルール侵入は內政的にもドイツにとりて有利なものであつた。ドイツ國民はそれまで新聞記事に欺かれ、佛國は自由と進步との味方なりと信じて居た。然るに親しくルールの暴舉を見るに及んで國民の眼は漸く醒めはじめた。一九一四年はドイツの勞働者に國際主義を放棄して國家の爲に進んで劍をとらしめた。彼等は國家間の鬪爭に於ては畢竟弱の肉は强の食たることを知るに至つたからである。一九二三年は少くともドイツ國民の一部に佛國に對する迷夢をさまさ

せた。

佛兵のルールに入るや、はじめは頗る足が重かつたやうであつた。當時のドイツとしては佛の橫暴に處する途は二つあつた。一つは相手の言ふが儘に忍んで居ることだ。もう一つは起つて敵にブツかることだ。限りなくいつまでも窘められて不安の生を送らんとするよりは、寧ろ生死を一擧に決するのだ。而してドイツとしてはこの他に途はなかつたのだ。

然るに當時の宰相クノーは賢明にも第三の途を發見した。而して所謂國家主義の諸政黨も亦之を稱讚し、感嘆するに至つては言語道斷である。

ルール占領はヴェルサイユ條約違反である。佛は自ら條約違反の罪を敢てして、同僚の英伊を踏みつけにしたのである。從つてルール占領は冒險であるから佛としてはどうしてもうまく結末をつけねばならぬ地位に立つた。他方ドイツはさしあたり武器を執つて抵抗することは出來ないが、軍備なきものの外交が如何にみじめなものであるかを實物を以て國民に敎育するには絕好の機會だ。始めから積極的に抵抗するの準備もなくして「交涉に應せず」などと强がるのは馬鹿の骨頂だ。それも最後迄頑張り得れば一策であるが、中途から滯々交涉に應じなければならぬとあつては恥の上塗りと言ふものだ。

さりながら斷つて置くが、余は武力に依つてルール占領を阻止すべきであつたと言ふのではない。

調一0113

0058

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

當時にありてはそんなことをするのは殆ど狂氣の沙汰だ。唯遺憾なのは當局が無爲にして祖國再軍備の機會を空しく逸し去つたことである。當時の佛は暴慢を極めたのであるからドイツ政府はそれを利用して國民の敵愾心を昂り、窃かに再軍備の準備を始むべきであつたといふのだ。再軍備はヴェルサイユ條約で禁せられては居るが、條約は佛國が既に蹂躙して居る。ルール占領に依つて佛自ら條約違反を敢てしたのだから構ふことはない。武力を擁せざる外交は徒爾である。外交にはそれを支持する軍備が必要である。ルールの運命はいづれ外交交渉に依つて決せられるのであるが、その時に當つて我に軍備がなければ、主張を貫徹することが出來ぬ。ドイツに缺けて居るのは軍備である。それ故に我が當局としてはルール占領を利用し、國民の覺醒を促がして再軍備に着手すべきであつた。それをなさなかつたことを余は遺憾とするのである。一九一八年以來佛の我に對する態度を觀るに、いつも要求をおつかぶせるばかりで殆んど我に口を利かせない。之も畢竟軍備なきを知つて我を見縊るからである。ロイド・ジョージはドイツから來る代表者はつまらぬ人物ばかりだと言つた。ドイツ代表のつまらぬ人間であつたことはロイド・ジョージの言ふ通りだが、假に優れた代表を送つたとしても、軍備の背景なき外交では屈辱に終るを免かれなかつたであらう。

さりながら軍備再興には先づ國民の精神的武裝が必要である。之あつて始めて武力も全きを得るのである。

五、禍根マルキシスト

一九一八年の敗北は一九一四年から一五年にかけて現はれたマルキシストの跳梁を放任して置いた爲である。從つて今まさにドイツが再び爲さんとするところあれば、先づ一九二三年の騷擾を利用してマルキシスト一派に大彈壓を下し、惡の源を根絶すべきであつた。

世界大戰の敗北は内よりマルキシストが味方の背後を衝いた爲である。されば今後再び佛國を敵として戰はんとするに當りては、獅子身中の虫とも稱すべき國内の不逞分子を驅除すべきは當然である。然るに諸政黨は之を等閑に付せるのみならず、却つてマルキシストを支持するの傾向を示した。彼等曰く、マルキシストも嘗ては祖國を毒したかも知れぬが、今日のマルキシストは往年のマルキシストでない。マルキシストは今や國家的に轉向して來たと。凡そ世の中にこれ程馬鹿なことはない。ハイエナは打たれても腐肉の側を離れない。マルキシストはいつまで經つてもマルキシストだ。國家を喰ひ盡さずば止まぬ。或は曰く、ドイツの勞働者は祖國の爲に働いたではないかと。併しそれはマルキシストでなかつたからだ。若し彼等がしんからマルキシストであつたなら、ドイツは三週間を出でざるうちに内から崩壞したであらう。獨軍にあれだけの抵抗の出來たのはマルキシストであつた勞働者も戰爭と共に祖國を愛する忠勇の兵士となつた爲である。而もその最後に再び赤に歸つたのは當

調一0113
0059
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

局が赤の取締を嚴重にすることを忘れ、自由にマルキシストの宣傳を繼續させた爲である。赤の宣傳者は數にして一萬四五千人に過ぎない。されば當時政府が肚を決めて彼等を早きに於て處分して了つたら、恐らくは後に至つてあのやうな害毒を流すことがなかつたのであらう。

一九二三年はまさに一九一八年の狀態に酷似するものがあつた。從つて如何なる抵抗を佛國に對して試むるにしても、ドイツとしては先決問題として國內不逞分子を芟除するの必要があつた。それが出來なければ、外との太刀打は初から出來ないのだ。されば若し政府に人物があつたら當然祖國愛に燃ゆる團體を發見して之を支持し、マルキシストに對抗せしめるべきであつた。治安の維持などといふ弱いことを言つて居らず、寧ろ國內のドサクサ紛れに乘じてマルキシストを處分させて了つた方が良かつたのだ。それが出來ないといふなら、佛國に抵抗するなど夢にも及ばぬことであつた。

マルキシストの處分は內亂を惹起したかも知れない。政府がマルキシストの處分を避けたのはその爲であらうと思はれる。併し人生は畢竟鬪爭だ。鬪爭を恐れて居て何が出來るか。內亂元より欣ぶべきではないが、內亂を經て鞏固な國家が生れ出ることはあるが、び縫をことして僅かに平和を保つてゐる國家は遂に土崩瓦解の一途あるのみだ。かくて一九二三年は一舉マルキシストを葬り去るべき時であつたが、遺憾ながら政府はその機を逸した。

當時余は聲をからして絕叫し、右翼諸黨に說いて我がナチスをしてマルキシストと一戰せしめんことを求めた。ナチス黨にマルキシストを叩かせよといふのである。然るに一人として余の說に耳を傾くるものなくして、マルキシストを放任して置き、ルール侵入の大團圓はドイツの屈伏となつた。

六、巨人ムッソリーニ

こゝに至りて余は既成政黨の爲すなきをつく〳〵と感じた。彼等はマルキシストと爭ふと雖も、それはマルキシストを排除せんが爲でなくて、政權爭奪の競爭相手としてである。同時に彼等のめざすところは祖國の復興ではなくマルキシストと共に倒れつゝある祖國の利權を分配することであつた。

この時に當りてアルペンの南に於て祖國の爲に奮鬪する一偉人があつた。それはムッソリーニである。余は彼の仕事を見る每に感嘆の聲を發せざるを得なかつた。彼の偉大なる所以はインタナショナリズムを避けて、國民の心に祖國愛を呼び起したことである。マルキシストと妥協せずして飽く迄之と戰つたことである。

ムッソリーニをジャイアントとすればドイツのデモ政治家は一寸法師だ。その法師どもが大きなことを言つて居るのを聞くと胸がわるくなる。ドイツにも嘗てはビスマルクといふ偉人が居たのに、今日のこの有樣は何だ。余はそゞろに憤慨せざるを得ない。

既成政黨の無氣力この如くにしてマルキシストと戰ふ氣力なき以上佛に對してどんな抵抗を試みて

調一0113
0060
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

も無益であることは始めより明かである。マルキシストは內なる敵である。之を處分せずして外敵を驅逐し得る道理がない。當時政府が國民の憤激をなだめる爲に兵を起したとて、それは畢竟兒戲に均しいものであつたらう。政府としてなすべきところは、今も言つた通り先づ國內の結束を固めるべきであつた。戰の勝敗は武器にあらずして鬪志にある。ドイツは戰ふ前に先づ國民の鬪志を固むべきであつた。

繰り返して云ふ、ドイツはルール占領を利用して國內のマルキシズムを處分すべきであつた。ドイツは嘗て外敵と戰つて敗けたことはない。いづも敗れるのは國內の混亂によるのである。故にドイツがマルキシズムの禍害から解放される時は、卽ちドイツを束縛する總ての鐵鎖の絕ち切らるる時である。これ卽ち、外なる敵を打破る前に內なるマルキシズムを處分せよと云ふ所以である。ドイツ當局にはそんな思ひ切つたことが出來る筈がない。彼等としては寧ろ何等爲すところなく成り行きに任せた方が良かつたのである。

七、クノー宰相國を誤る

當時の宰相クノーは事務の才はあつたかも知れぬが、經綸ある政治家ではなかつた。彼は政治をも經濟的企業の立場から見る人間であつたから、ルール對策も亦極めてケチなものたらざるを得なかつた。

クノーは曰つた。

『佛軍はルールを占領した。ルールには何がある。石炭がある。それならば佛軍のルールを占領したのは石炭の爲だらう。』

これがクノー式の考へ方だ。從つてドイツ側でストライキを行ひ、採炭を困難ならしめたら採算がとれないから、佛軍は畢竟ルールを放棄して引揚げるの他はあるまい。クノーはさう判斷して總罷業の準備をなした。ところでストライキをやるとなれば勞働者の手に依らなければならず、勞働者を動かすにはマルキシストの力を借りなければならぬ。こゝに於て政府の案出したのが國家本位の諸政黨とマルクス派政黨との大同團結である。而して政府は直ちに之を實行したのであるが、この如き團結の有害にして無益な事は始から明かであつた。マルキシストは元來非國家主義である。機會があつたら國家を打倒さんとしてゐるものである。彼等は國家の裏切者である。國家の裏切者と一つになつて國家を守らんとするが如きは愚の骨頂である。

加之、ルール占領に處する對策としてストライキは何の役にも立たぬ。國家が一度他の屬領となれば哀訴嘆願したつて獨立を許して呉れるものではない。ストライキだつて效果のなき點に於て無益な嘆願と選ぶ處がない。ストライキは卽ち怠業である。手を休めて何にもしないことだ。クノーは國民

調一0113
0061
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に何にもしないやうに勧めるよりも、寧ろ二時間餘計に働くことを慫慂すべきであつた。クノー政府の右の對策は所謂消極的抵抗と稱せられた。この抵抗は畢竟永くは續かなかつた。それもその筈だ。人の國を占領せんとする程の軍隊が勞働者のストライキぐらゐで退却する道理はない。かくて消極的抵抗が徒らに數十億の金を使消し、マルクのドタ落を招來するに過ぎなかつたのは笑止な事である。

佛兵はドイツの抵抗がストライキに止まるを見て安心した。九年前獨軍が白耳義に侵入した際市民の中で邪魔するものがあれば容赦なく之を放逐した。今若しドイツ人が怠業に依り對手を苦しめんとし、それが甚だしくなれば、佛軍は容赦なく罷業者を放逐すれば足りる。それには一週間の時日をも要しない。問題はストライキを行ふドイツにどれだけの肚があるかに歸着する。即ち佛軍が我慢出來ず高壓手段に出て來る時、それでも尙抵抗を續ける肚があるか、ないかといふことだ。その肚が定まつて居れば、消極的抵抗も意義があるけれども、それがなければ始めから駄目なことは明かだ。包圍されて居る要塞は援兵の來る望みのある間は極力抵抗するが、望みなしとなれば雜作なく折れて降伏する。最後迄戰ふの決意なき消極的抵抗は早曉屈伏に終らざるを得ない。

ルールの抵抗は消極的なものである。而して之に當る大同團結はナショナリストとマルキストの苟合である。ルールの抵抗をして力强きものたらしむる爲には、ナショナリストだけの固き團結が背後になければならぬ。本土に八九十箇師團の軍が控へて居るんだといふことになれば、ルールの住民も本氣で抵抗出來たであらう。消極的抵抗などといふから尻込もするが、積極的な抵抗、ナショナリストだけの合同戰線といふことにすれば、國內でも志士の奮起する者が少くなかつたであらう。

右の如き見地に立つて、當時ナチスは消極的抵抗に反對し、之に加はらなかつた。而して似而非愛國者から非國民なりと罵聲を浴せられたけれども、信するところあつて我等は動かなかつた。而して歷史はやがて我等の態度の是なりしことを立證した。

かくて勞働組合の金庫はストライキを頼みとする政府の援助資金で重たくなつて行くばかりであつた。而も愈々消極的抵抗を捨てて積極的な鬪爭に入らんとするや否やの問題が持ち上つて來ると、これまでナショナリスト諸黨と大同團結をなしてゐた赤の連中は俄かに團結を解いて去り、再びもとの裏切者となり、クノーは辭職してドイツは慘敗の憂き目をみたこと世間公知の通りである。

當時軍部でもドイツの抵抗が、あのやうに果敢ない終を遂げようとは考へず、公然と戰爭まで行かずとも佛軍に一泡吹かせるくらゐなことは出來ると考へ、我等の間でも亦國衞軍の進退に密かに望みをかけて居たものもあつた。よもやドイツが泣寢入りにならうとは誰も思はなかつたのである。然るに數十億の金を費し、數千の靑年を犧牲に供したばかりで、ルールの抵抗が徒爾に終つたことを知るに及んで、國民の憤激は焰の如くあちらこちらに燃え上つた。而して國民は期せずして云つた、現下の政治組織を撤廢せざる限り、祖國ドイツを救ふの途なしと。

調一0113

0062

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

八、最高の眞理

ルールの抵抗はマルキシストが祖國の裏切者であることを明かにし、而して消極的抵抗による經濟的破産の爲に民衆は飢饑に瀕するに至つた。政府は國民を犧牲とし國民の財産を奪ひ、國民の信頼を裏切つたのである。若し政府を倒さんとせば、この秋よりよきはなかつた。これ我等の蹴起となつた所以である。余はこゝに一九二四年の公判廷に於ける余の陳述の終の言葉を引用する。

『判事諸公がどんな判決を下さうと、それは我等の知つたことでない。世の中にはこの法廷のそれよりももつと高い眞理があり、もつと良い法律がある。それは歴史の裁きである。恐らくは歴史はやがて諸公の判決を棄却して、我等に無罪の宣告を與ふるの日があらう。』

今や一部のものは政權の地位にあつて法と正義とを蹂躙し、國民を艱難の淵へ追込み、國家存亡の間に處して、尙且奉公を忘れて私利を事とする。これ等の徒輩も亦歴史の判決を受けねばなるまい。

余はこゝに一九二三年の一一・八事件（註）に就きくだ〳〵と述べることを差控へるであらう。過ぎたことは後で何と言つても甲斐がない。癒りかけた傷口を再びかきあけることも良くなければ、當時我等を敵とした人々の中には、志は同じでありながら我等の行動を理解することの出來なかつた人達も少くなかつたからである。我等はやがて叛逆者の陣營に對して共同戦線を張らねばならぬ。（了）

附錄

ビューロー公「備忘錄」より

十九世紀末にあたりて、ロシヤは未だ日露戦爭の敗北を喫して居らず、新たに太平洋、殊に直隷灣に出口を得てこの方面に一大發展を遂げんとする時であつた。而して英と露とはアジヤ問題を中心として反目を續け、兩國の關係は著しく緊張の狀態にあつた。從つて若しドイツがうつかり英國と同盟を結ぶやうなことがあれば英國の爲にドイツはロシヤを叩かねばならぬ羽目に陷る虞があつた。この役目はドイツが遁れた爲、後に日本へ廻つて行つた。而も日本としてはロシヤと戦ふのにいろいろ便宜があつたけれども、ドイツがロシヤの相手になることになれば少からぬ不利があつた。日露戦爭はロシヤでは人氣がなかつた。而してその戦は植民地戦爭の性質を帶びロシヤとしては遠く離れた極東へ兵を出さねばならぬのだ。然るに獨露戦爭となれば事情が一變する。ロシヤ人は日本と戦ふのを好まなかつたけれども、ドイツを相手の戦爭となるとロシヤ人は奮ひ立つのだ。而して戦場も本國から遠くはなくロシヤとしては國力を擧げて戦ひ得る。その上獨露戦爭となればフランスは同盟の誼に依り直ちに起つてドイツを衝くことが出來る。フランスにとりては獨露戦爭は復讐戦の好機會である。當時英はボーア戦爭の前に立つて居た。この如き地位にある英國にとり歐

調一0113

0063

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

羅巴大陸が獨露佛の戰場となることは望んでも得がたき好運である。十八世紀の中葉及び十九世紀の初頭に於て、英國の勢力の伸びたのは大陸の紛爭に乘じた結果に過ぎない。英はそれと同じ機會を終末に近い十九世紀に於て求めんと欲したのだ。今英獨同盟してロシヤに當るとすれば、ドイツは佛露兩方面に敵を受けねばならぬ。卽ち復背に敵を受くる苦境に置かれるのである。之に反し、英は居ながらにしてドイツの貿易を麻痺せしめ、己の植民地を擴張し、更に大陸諸國を、殊に獨露佛相戰ふの疲れを利用することが出來る。現在の世界大戰はフランスが英國に利用せられてドイツと戰つて居るのだ。若し曩にドイツが英國に煽てられてロシヤと戰つて居たら、今日のフランスと同じ運命に陷つて居たであらう。英國に利用せられるばかりであつたのだ。更に吾等の當時の大目的は海上に大艦隊を浮べることであつた。然るに若し陸上の戰に疲れて終つたら豫定通りの海軍を完成することが永遠に出來なくなつたであらう。これがロシヤとの戰を回避した主なる理由であつたとさへ言へる。英露兩國の角逐する時こそドイツがその海軍を强固にする絶好の機會である。その機會を利用せず、反つてロシヤと戰つたりして居たら、有力な艦隊を組織する時は當分なくなる。從つて世界政策の上に於て英國に商が立たなくなるのだ。英獨同盟の提案はジョーゼフ・チェンバレンから持ちかけられた。但しそれには首相ソールズベリがバックして居た譯ではなかつた。當時ロシヤは極東で跋扈して居り、英國はそれを掣肘するのに苦んで居た時であるから、ドイツが英の番

犬となつて、代つてロシヤを叩きつけたら、英國にとりてはそれ程都合の良いことはなかつたであらうが、ドイツとしては英國に利用せられ、英國の爲に火中の栗を拾ふ役目を演ずるに至つたであらう。何れにしてもドイツとしては、英國に對して卽かず離れずの態度を持し、之に利用されぬのが賢明な策であつた。(了)

〔註〕當日ミュンヘンに勃發したナチスのクーデ・ター。(所謂ヒトラー・プッチュ)

調一0113

0064

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

（〔続〕は結言の部）

ア

アドリア海　四六
アメリカ合衆国（米国を見よ）
アリアン文化　六二
アリアン民族　三一
アルサス・ローレン　五九、九一、九五
アルトリ　九二
アレキサンダ大王　七六
アングロ・サクソンの世界　一四

イ

イギリス（英国をも見よ）
イギリスの外交　三九、四〇
イギリスの反獨同盟　四〇
イジプト（エジプトを見よ）
イタリー　三一、三三、三四、三五、三六
イタリーとオーストリ　四五、三三、三四、四六
イタリーとドイツ　七七、八七、八
イタリーとフランス　四六
イタリーの自主的外交　六〇
イタリーの勃興　八七
伊・英・獨新三國同盟論　八七、八
インテリゲンチヤ　七六、七九
印度と英国　七六、八〇
印度の「志士」　七八、七九、八〇

ヴ

ヴィエンナ（ヴィーンを見よ）
ヴィーン　一、三三、三六、三五、三二
ヴィーン會議
ヴェルサイユ條約（ベルール占領）　五五、七七、九六

エ

英国（イギリス及アングロサクソンをも見よ）　七三
英国の外交　三九、四〇
英国の經済的征服　三一、三〇
英国の宣傳　三〇
英国と印度　七六、八〇
英国とオーストリ　二五
英国とドイツ　（一五、一六、一九、二〇、三七、三九、四〇、四二、四八、九三、九三）　四〇
英国の反獨同盟　四二、四六
英国とフランス　六〇
英国と米国　二六
英国とロシヤ　四〇
英国の對獨政策　六一
英・獨・伊新三國同盟論　四七、八七、八
英帝國の偉大さ　二二
英帝國瓦解説　八〇
埃及（エジプト）　八
埃及の「志士」　七八、七九
エドワード七世　二五、八八
エリザベス女皇　三九
エルベ河　六九、九三

オ

オーストリと英国　二五
オーストリとドイツ　（二三、三四、三五、三九、三四、三二、三六、三九、七七、七八、八二）　四一七
オーストリ・ドイツ人　三三
オーストリのスラヴ化　一七
オーストリヤ（オーストリを見よ）　（二三、三四、三五、一七、二二、三三、三四、三五、三六）　四〇
オランダ

カ

海軍擴張　一八
海軍復興の聲　五七
カメルン　二二
カルセージ　八九

ガ

外交（ナチス外交をも見よ）　四〇
外交の本義　六一

キ

強國の資格　四七、八七、八
強者の天下　二二
八〇
八

ギ

犠牲の精神　六六
ギリシヤ　九

ク

クノー（ヴィルヘルム）宰相　（一〇二、一〇三、一〇五）

調一0113

0065

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

クラウゼヴィッツ(カール・フォン)　八九
クレマンソー(ジョルジュ)　九四

ケ

経済的征服　二〇―二一、二七
経済と国家　二七―二三

コ

コサノ　九二
国家と経済　二七―二三
国家の元氣　二九、三〇
国家の本質　二八、三一
国境變更の原動力　七三―四
「国際事情」　一(緒)
国内開發　七―一

サ

三国同盟(獨・墺匈・伊)　一―五、二七―九
産兒制限　六七
サン・セルマン條約　五三

シ

支部　六六
種族保存の本能　三一
主知主義の弊　六三
商賣人根性　二八、三一
植民政策を捨てよ　八五
植民地問題　一四三―三七、五七―七五、八五
商工政策(ドイツの)　二一、二三―八、二四―三三
新三國同盟論(獨・英・伊)　二四―五

ジ

自己保存の權利　一三
人口と土地との調和　六四
人道主義(有害なる)　九―一〇
人類の自然淘汰　六

ス

スペイン　四〇、四三
スラヴ族　四三、八五

セ

戰爭と同盟　八二
戰爭と文化　三八

ソ

宣傳(アロバガンダをも見よ)　三〇
宣傳(英國の)　八二
宣傳(ユダヤ系新聞の)　四九、六〇、六二
宣傳(聯合國側の)　四八、五六
ソヴィエト社會主義共和國聯邦(ソ聯)(ロシヤを見よ)　一〇八
ソールズベリ侯(ロバート・アーサー)　一〇八
ソンム　九三

タ

大國の長所　一一
大陸發展策(東進政策をも見よ)　三七
ダレーラン　七二

ダ

ダウニング・ストリート　九五

チ

チェッコ　五九
チェンバレン(ジョーセフ)　一〇八
徴兵制度(再)ナロル　六九
五一―四、五三、五四、五九

ツ

ツェッペリン空襲　四六

ト

東進(東方政策をも見よ)　七五―七
東進の好機　六八―七〇
東進の必然性　八六
東方政策(東進政策をも見よ)　六四
東方政策の一手　八
土地と人口の調和　七九、九二、九三
土地の生産選擇の原則
土耳古とドイツ

ド

ドイツ(ナチスをも見よ)　三四―五、八七―八
ドイツと英國
獨・墺同盟　三四、五、一七、三三、三四、三五、三六
獨・墺匈・伊三國同盟　三七―九
ドイツ近代外交の失敗　六七―八
ドイツとイタリー　七七、八七―八
ドイツとオーストリ　(一三、四、五、一九、二四、三五、三六、三九、七七、七八、八二)
ドイツと英國　(一五、一九、三七、三九、四〇、四一、四八、九二、九三)

一一二

ドイツとトルコ　七九
ドイツとフランス　(四二、五九、八九、九一、九三、五、九五、八)
ドイツと歐羅巴　四九
ドイツとロシヤ　一九、六三、七六、八三、五
ドイツの人口　五、六五―七
(ギーストリ)ドイツ人　四一―七
ドイツの海軍政策　二〇
ドイツの國境恢復　七〇、七一、七三
ドイツの國土難　六五
ドイツの政治家　三四、三八、七三
ドイツの商工政策　二一、二一、八、二四
ドイツの統一　三八
ドイツの四つの生き方　六一―二
ドイツの復興　五四―六
ドイツ排斥輿論の處理　五六―九
ドイツ民族闘爭の跡　六八―九
ドイツ民族の尚武の精神　三三
獨佛危機の經頂　九三―五
獨立の精神　三六
ドーズ案　九〇
同盟の相手　四四―七
同盟と戰爭　八二
同盟の本領　一六、四五
同盟の目標　五、三四、八二

ナ

ナチス　(三五、五八、六三、六六、六四、六七、一五〇、七三、七六、七七、七八、一〇〇)

ナチス外交の要諦
ナポレオン一世

ニ

「日當のパン」
ニジニ・ノヴゴロッド　六六、六四
日英同盟　一(緒)
日露戰爭　二(緒)、一六、六一
日本とユダヤ人　三(緒)、三(緒)、四(緒)、一六、一〇七
ニューレンベルヤ　六一
人間の慈　九二
　　七

ノ

農は國の本　六三、六四
　　五五

ハ

排獨輿論の處理　四〇、四五
ハノヴ　一
ハプスブルヤ王朝　三
反獨同盟(英の)　三四、一七、三三、三六

バ

バユヴール族　九二
バルカン　五六―九
バルカン戰爭　六九
　　一六、四五

パ

パン・スラヴ主義　八五

ヒ

ヒトラー(アードルフ)　一(緒)

ピ

ビスマルク(オットー・フォン)　三一
ビスマルク外交の檢討　九二
ビューロー(ベルン)ハルト)公傳忘録　二(緒)、一六、六六、一〇七
　　(三、三三、三七、七八、一〇一)
　　七一―八
　　四(緒)、一〇七―九

ビ

ビューニック戰爭　三八

フ

佛獨危機の經頂　九三―五
フライマウレル　六〇
フランスの外交　四五
フランスと英國　四二、四六
フランスとドイツ　(四二、五九、八九、九一、九三、五、九五、八)
フランスの產兒制限　九二
フランスの覇心　九三
フランスのショーヴィニズム　九六
フランスの土人軍　五〇
フランスの狙ひ　六六
フランスのルール侵入　九一―三
フランダ　九五、八
フレドリック大王　九六
　　三八

ブ

一一三

調―0113

0066

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ブランデンブルグ・プロイセン　六九
ブルボン王朝　四五
文化と戦争　三八

プ

プラーグ（プラハ）　三
プロシヤ　二九、三二、六九、九〇
プロシヤの陸軍　三九
プロパガンダ（宣傳をも見よ）
プロパガンダ　二一

ヘ

平和論（有害なる）　一〇

ベ

米國　一三、一四、四〇
米國と英國　六〇
米國と日本　六〇
米國とユダヤ人　六一

ペ

ペリクリス　三八
ペルシヤ戰爭　七三

ホ

ホーヘンツオルレルン　六九

ボ

ボルシェヴィキ　六三
ボルシェヴィズム　七六、八四、八五

波蘭　八一

マ

マイン・カムプ　一（續）
マインツ　九二
マルキシスト　九九、一〇一、一〇三、一〇四
マルキシズムの教理　三一、三三
マルクスを讀み直す　三三

ミ

南チロルの問題　五一、四
ミュニック（ミュンヘンを見よ）
ミュンヘン（の思出）　一一、二五、二六
民族保存の本能　一〇

ム

ムッソリーニ（ベニート）　一〇一

ユ

ユダヤ人　二五、二六、三一、三三、三八、四九、五〇、五一、五九、六〇、六一、六二、七二、七六、七七、八一、八三、八四、九〇、九一、九二、九四、九〇、九六、一〇一、一〇二、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、一二六、一二七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一一、三一二、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、四五九、四六〇、四六一、四六二、四六三、四六四、四六五、四六六、四六七、四六八、四六九、四七〇、四七一、四七二、四七三、四七四、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一一、五一二、五一三、五一四、五一五、五一六、五一七、五一八、五一九、五二〇、五二一、五二二、五二三、五二四、五二五、五二六、五二七、五二八、五二九、五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、五三五、五三六、五三七、五三八、五三九、五四〇、五四一、五四二、五四三、五四四、五四五、五四六、五四七、五四八、五四九、五五〇、五五一、五五二、五五三、五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一一、七一二、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五一、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七一、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一一、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五一、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一一、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五一、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七一、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九一、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇、一〇〇一、一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四、一〇〇五、一〇〇六、一〇〇七、一〇〇八、一〇〇九、一〇一〇、一〇一一、一〇一二、一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六、一〇一七、一〇一八、一〇一九、一〇二〇、一〇二一、一〇二二、一〇二三、一〇二四、一〇二五、一〇二六、一〇二七、一〇二八、一〇二九、一〇三〇、一〇三一、一〇三二、一〇三三、一〇三四、一〇三五、一〇三六、一〇三七、一〇三八、一〇三九、一〇四〇、一〇四一、一〇四二、一〇四三、一〇四四、一〇四五、一〇四六、一〇四七、一〇四八、一〇四九、一〇五〇、一〇五一、一〇五二、一〇五三、一〇五四、一〇五五、一〇五六、一〇五七、一〇五八、一〇五九、一〇六〇、一〇六一、一〇六二、一〇六三、一〇六四、一〇六五、一〇六六、一〇六七、一〇六八、一〇六九、一〇七〇、一〇七一、一〇七二、一〇七三、一〇七四、一〇七五、一〇七六、一〇七七、一〇七八、一〇七九、一〇八〇、一〇八一、一〇八二、一〇八三、一〇八四、一〇八五、一〇八六、一〇八七、一〇八八、一〇八九、一〇九〇、一〇九一、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一〇〇、一一〇一、一一〇二、一一〇三、一一〇四、一一〇五、一一〇六、一一〇七、一一〇八、一一〇九、一一一〇、一一一一、一一一二、一一一三、一一一四、一一一五、一一一六、一一一七、一一一八、一一一九、一一二〇、一一二一、一一二二、一一二三、一一二四、一一二五、一一二六、一一二七、一一二八、一一二九、一一三〇、一一三一、一一三二、一一三三、一一三四、一一三五、一一三六、一一三七、一一三八、一一三九、一一四〇、一一四一、一一四二、一一四三、一一四四、一一四五、一一四六、一一四七、一一四八、一一四九、一一五〇、一一五一、一一五二、一一五三、一一五四、一一五五、一一五六、一一五七、一一五八、一一五九、一一六〇、一一六一、一一六二、一一六三、一一六四、一一六五、一一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七〇、一一七一、一一七二、一一七三、一一七四、一一七五、一一七六、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一八一、一一八二、一一八三、一一八四、一一八五、一一八六、一一八七、一一八八、一一八九、一一九〇、一一九一、一一九二、一一九三、一一九四、一一九五、一一九六、一一九七、一一九八、一一九九、一二〇〇、一二〇一、一二〇二、一二〇三、一二〇四、一二〇五、一二〇六、一二〇七、一二〇八、一二〇九、一二一〇、一二一一、一二一二、一二一三、一二一四、一二一五、一二一六、一二一七、一二一八、一二一九、一二二〇、一二二一、一二二二、一二二三、一二二四、一二二五、一二二六、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三一、一二三二、一二三三、一二三四、一二三五、一二三六、一二三七、一二三八、一二三九、一二四〇、一二四一、一二四二、一二四三、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七、一二四八、一二四九、一二五〇、一二五一、一二五二、一二五三、一二五四、一二五五、一二五六、一二五七、一二五八、一二五九、一二六〇、一二六一、一二六二、一二六三、一二六四、一二六五、一二六六、一二六七、一二六八、一二六九、一二七〇、一二七一、一二七二、一二七三、一二七四、一二七五、一二七六、一二七七、一二七八、一二七九、一二八〇、一二八一、一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、一二八六、一二八七、一二八八、一二八九、一二九〇、一二九一、一二九二、一二九三、一二九四、一二九五、一二九六、一二九七、一二九八、一二九九、一三〇〇、一三〇一、一三〇二、一三〇三、一三〇四、一三〇五、一三〇六、一三〇七、一三〇八、一三〇九、一三一〇、一三一一、一三一二、一三一三、一三一四、一三一五、一三一六、一三一七、一三一八、一三一九、一三二〇、一三二一、一三二二、一三二三、一三二四、一三二五、一三二六、一三二七、一三二八、一三二九、一三三〇、一三三一、一三三二、一三三三、一三三四、一三三五、一三三六、一三三七、一三三八、一三三九、一三四〇、一三四一、一三四二、一三四三、一三四四、一三四五、一三四六、一三四七、一三四八、一三四九、一三五〇、一三五一、一三五二、一三五三、一三五四、一三五五、一三五六、一三五七、一三五八、一三五九、一三六〇、一三六一、一三六二、一三六三、一三六四、一三六五、一三六六、一三六七、一三六八、一三六九、一三七〇、一三七一、一三七二、一三七三、一三七四、一三七五、一三七六、一三七七、一三七八、一三七九、一三八〇、一三八一、一三八二、一三八三、一三八四、一三八五、一三八六、一三八七、一三八八、一三八九、一三九〇、一三九一、一三九二、一三九三、一三九四、一三九五、一三九六、一三九七、一三九八、一三九九、一四〇〇、一四〇一、一四〇二、一四〇三、一四〇四、一四〇五、一四〇六、一四〇七、一四〇八、一四〇九、一四一〇、一四一一、一四一二、一四一三、一四一四、一四一五、一四一六、一四一七、一四一八、一四一九、一四二〇、一四二一、一四二二、一四二三、一四二四、一四二五、一四二六、一四二七、一四二八、一四二九、一四三〇、一四三一、一四三二、一四三三、一四三四、一四三五、一四三六、一四三七、一四三八、一四三九、一四四〇、一四四一、一四四二、一四四三、一四四四、一四四五、一四四六、一四四七、一四四八、一四四九、一四五〇、一四五一、一四五二、一四五三、一四五四、一四五五、一四五六、一四五七、一四五八、一四五九、一四六〇、一四六一、一四六二、一四六三、一四六四、一四六五、一四六六、一四六七、一四六八、一四六九、一四七〇、一四七一、一四七二、一四七三、一四七四、一四七五、一四七六、一四七七、一四七八、一四七九、一四八〇、一四八一、一四八二、一四八三、一四八四、一四八五、一四八六、一四八七、一四八八、一四八九、一四九〇、一四九一、一四九二、一四九三、一四九四、一四九五、一四九六、一四九七、一四九八、一四九九、一五〇〇、一五〇一、一五〇二、一五〇三、一五〇四、一五〇五、一五〇六、一五〇七、一五〇八、一五〇九、一五一〇、一五一一、一五一二、一五一三、一五一四、一五一五、一五一六、一五一七、一五一八、一五一九、一五二〇、一五二一、一五二二、一五二三、一五二四、一五二五、一五二六、一五二七、一五二八、一五二九、一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三、一五三四、一五三五、一五三六、一五三七、一五三八、一五三九、一五四〇、一五四一、一五四二、一五四三、一五四四、一五四五、一五四六、一五四七、一五四八、一五四九、一五五〇、一五五一、一五五二、一五五三、一五五四、一五五五、一五五六、一五五七、一五五八、一五五九、一五六〇、一五六一、一五六二、一五六三、一五六四、一五六五、一五六六、一五六七、一五六八、一五六九、一五七〇、一五七一、一五七二、一五七三、一五七四、一五七五、一五七六、一五七七、一五七八、一五七九、一五八〇、一五八一、一五八二、一五八三、一五八四、一五八五、一五八六、一五八七、一五八八、一五八九、一五九〇、一五九一、一五九二、一五九三、一五九四、一五九五、一五九六、一五九七、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇六、一六〇七、一六〇八、一六〇九、一六一〇、一六一一、一六一二、一六一三、一六一四、一六一五、一六一六、一六一七、一六一八、一六一九、一六二〇、一六二一、一六二二、一六二三、一六二四、一六二五、一六二六、一六二七、一六二八、一六二九、一六三〇、一六三一、一六三二、一六三三、一六三四、一六三五、一六三六、一六三七、一六三八、一六三九、一六四〇、一六四一、一六四二、一六四三、一六四四、一六四五、一六四六、一六四七、一六四八、一六四九、一六五〇、一六五一、一六五二、一六五三、一六五四、一六五五、一六五六、一六五七、一六五八、一六五九、一六六〇、一六六一、一六六二、一六六三、一六六四、一六六五、一六六六、一六六七、一六六八、一六六九、一六七〇、一六七一、一六七二、一六七三、一六七四、一六七五、一六七六、一六七七、一六七八、一六七九、一六八〇、一六八一、一六八二、一六八三、一六八四、一六八五、一六八六、一六八七、一六八八、一六八九、一六九〇、一六九一、一六九二、一六九三、一六九四、一六九五、一六九六、一六九七、一六九八、一六九九、一七〇〇、一七〇一、一七〇二、一七〇三、一七〇四、一七〇五、一七〇六、一七〇七、一七〇八、一七〇九、一七一〇、一七一一、一七一二、一七一三、一七一四、一七一五、一七一六、一七一七、一七一八、一七一九、一七二〇、一七二一、一七二二、一七二三、一七二四、一七二五、一七二六、一七二七、一七二八、一七二九、一七三〇、一七三一、一七三二、一七三三、一七三四、一七三五、一七三六、一七三七、一七三八、一七三九、一七四〇、一七四一、一七四二、一七四三、一七四四、一七四五、一七四六、一七四七、一七四八、一七四九、一七五〇、一七五一、一七五二、一七五三、一七五四、一七五五、一七五六、一七五七、一七五八、一七五九、一七六〇、一七六一、一七六二、一七六三、一七六四、一七六五、一七六六、一七六七、一七六八、一七六九、一七七〇、一七七一、一七七二、一七七三、一七七四、一七七五、一七七六、一七七七、一七七八、一七七九、一七八〇、一七八一、一七八二、一七八三、一七八四、一七八五、一七八六、一七八七、一七八八、一七八九、一七九〇、一七九一、一七九二、一七九三、一七九四、一七九五、一七九六、一七九七、一七九八、一七九九、一八〇〇、一八〇一、一八〇二、一八〇三、一八〇四、一八〇五、一八〇六、一八〇七、一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一一、一八一二、一八一三、一八一四、一八一五、一八一六、一八一七、一八一八、一八一九、一八二〇、一八二一、一八二二、一八二三、一八二四、一八二五、一八二六、一八二七、一八二八、一八二九、一八三〇、一八三一、一八三二、一八三三、一八三四、一八三五、一八三六、一八三七、一八三八、一八三九、一八四〇、一八四一、一八四二、一八四三、一八四四、一八四五、一八四六、一八四七、一八四八、一八四九、一八五〇、一八五一、一八五二、一八五三、一八五四、一八五五、一八五六、一八五七、一八五八、一八五九、一八六〇、一八六一、一八六二、一八六三、一八六四、一八六五、一八六六、一八六七、一八六八、一八六九、一八七〇、一八七一、一八七二、一八七三、一八七四、一八七五、一八七六、一八七七、一八七八、一八七九、一八八〇、一八八一、一八八二、一八八三、一八八四、一八八五、一八八六、一八八七、一八八八、一八八九、一八九〇、一八九一、一八九二、一八九三、一八九四、一八九五、一八九六、一八九七、一八九八、一八九九、一九〇〇、一九〇一、一九〇二、一九〇三、一九〇四、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇、一九一一、一九一二、一九一三、一九一四、一九一五、一九一六、一九一七、一九一八、一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三、一九二四、一九二五、一九二六、一九二七、一九二八、一九二九、一九三〇、一九三一、一九三二、一九三三、一九三四、一九三五、一九三六、一九三七、一九三八、一九三九、一九四〇、一九四一、一九四二、一九四三、一九四四、一九四五、一九四六、一九四七、一九四八、一九四九、一九五〇、一九五一、一九五二、一九五三、一九五四、一九五五、一九五六、一九五七、一九五八、一九五九、一九六〇、一九六一、一九六二、一九六三、一九六四、一九六五、一九六六、一九六七、一九六八、一九六九、一九七〇、一九七一、一九七二、一九七三、一九七四、一九七五、一九七六、一九七七、一九七八、一九七九、一九八〇、一九八一、一九八二、一九八三、一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八、一九八九、一九九〇、一九九一、一九九二、一九九三、一九九四、一九九五、一九九六、一九九七、一九九八、一九九九、二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇、二〇一一、二〇一二、二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六、二〇一七、二〇一八、二〇一九、二〇二〇、二〇二一、二〇二二、二〇二三、二〇二四、二〇二五、二〇二六、二〇二七、二〇二八、二〇二九、二〇三〇、二〇三一、二〇三二、二〇三三、二〇三四、二〇三五、二〇三六、二〇三七、二〇三八、二〇三九、二〇四〇、二〇四一、二〇四二、二〇四三、二〇四四、二〇四五、二〇四六、二〇四七、二〇四八、二〇四九、二〇五〇、二〇五一、二〇五二、二〇五三、二〇五四、二〇五五、二〇五六、二〇五七、二〇五八、二〇五九、二〇六〇、二〇六一、二〇六二、二〇六三、二〇六四、二〇六五、二〇六六、二〇六七、二〇六八、二〇六九、二〇七〇、二〇七一、二〇七二、二〇七三、二〇七四、二〇七五、二〇七六、二〇七七、二〇七八、二〇七九、二〇八〇、二〇八一、二〇八二、二〇八三、二〇八四、二〇八五、二〇八六、二〇八七、二〇八八、二〇八九、二〇九〇、二〇九一、二〇九二、二〇九三、二〇九四、二〇九五、二〇九六、二〇九七、二〇九八、二〇九九、二一〇〇、二一〇一、二一〇二、二一〇三、二一〇四、二一〇五、二一〇六、二一〇七、二一〇八、二一〇九、二一一〇、二一一一、二一一二、二一一三、二一一四、二一一五、二一一六、二一一七、二一一八、二一一九、二一二〇、二一二一、二一二二、二一二三、二一二四、二一二五、二一二六、二一二七、二一二八、二一二九、二一三〇、二一三一、二一三二、二一三三、二一三四、二一三五、二一三六、二一三七、二一三八、二一三九、二一四〇、二一四一、二一四二、二一四三、二一四四、二一四五、二一四六、二一四七、二一四八、二一四九、二一五〇、二一五一、二一五二、二一五三、二一五四、二一五五、二一五六、二一五七、二一五八、二一五九、二一六〇、二一六一、二一六二、二一六三、二一六四、二一六五、二一六六、二一六七、二一六八、二一六九、二一七〇、二一七一、二一七二、二一七三、二一七四、二一七五、二一七六、二一七七、二一七八、二一七九、二一八〇、二一八一、二一八二、二一八三、二一八四、二一八五、二一八六、二一八七、二一八八、二一八九、二一九〇、二一九一、二一九二、二一九三、二一九四、二一九五、二一九六、二一九七、二一九八、二一九九、二二〇〇、二二〇一、二二〇二、二二〇三、二二〇四、二二〇五、二二〇六、二二〇七、二二〇八、二二〇九、二二一〇、二二一一、二二一二、二二一三、二二一四、二二一五、二二一六、二二一七、二二一八、二二一九、二二二〇、二二二一、二二二二、二二二三、二二二四、二二二五、二二二六、二二二七、二二二八、二二二九、二二三〇、二二三一、二二三二、二二三三、二二三四、二二三五、二二三六、二二三七、二二三八、二二三九、二二四〇、二二四一、二二四二、二二四三、二二四四、二二四五、二二四六、二二四七、二二四八、二二四九、二二五〇、二二五一、二二五二、二二五三、二二五四、二二五五、二二五六、二二五七、二二五八、二二五九、二二六〇、二二六一、二二六二、二二六三、二二六四、二二六五、二二六六、二二六七、二二六八、二二六九、二二七〇、二二七一、二二七二、二二七三、二二七四、二二七五、二二七六、二二七七、二二七八、二二七九、二二八〇、二二八一、二二八二、二二八三、二二八四、二二八五、二二八六、二二八七、二二八八、二二八九、二二九〇、二二九一、二二九二、二二九三、二二九四、二二九五、二二九六、二二九七、二二九八、二二九九、二三〇〇、二三〇一、二三〇二、二三〇三、二三〇四、二三〇五、二三〇六、二三〇七、二三〇八、二三〇九、二三一〇、二三一一、二三一二、二三一三、二三一四、二三一五、二三一六、二三一七、二三一八、二三一九、二三二〇、二三二一、二三二二、二三二三、二三二四、二三二五、二三二六、二三二七、二三二八、二三二九、二三三〇、二三三一、二三三二、二三三三、二三三四、二三三五、二三三六、二三三七、二三三八、二三三九、二三四〇、二三四一、二三四二、二三四三、二三四四、二三四五、二三四六、二三四七、二三四八、二三四九、二三五〇、二三五一、二三五二、二三五三、二三五四、二三五五、二三五六、二三五七、二三五八、二三五九、二三六〇、二三六一、二三六二、二三六三、二三六四、二三六五、二三六六、二三六七、二三六八、二三六九、二三七〇、二三七一、二三七二、二三七三、二三七四、二三七五、二三七六、二三七七、二三七八、二三七九、二三八〇、二三八一、二三八二、二三八三、二三八四、二三八五、二三八六、二三八七、二三八八、二三八九、二三九〇、二三九一、二三九二、二三九三、二三九四、二三九五、二三九六、二三九七、二三九八、二三九九、二四〇〇、二四〇一、二四〇二、二四〇三、二四〇四、二四〇五、二四〇六、二四〇七、二四〇八、二四〇九、二四一〇、二四一一、二四一二、二四一三、二四一四、二四一五、二四一六、二四一七、二四一八、二四一九、二四二〇、二四二一、二四二二、二四二三、二四二四、二四二五、二四二六、二四二七、二四二八、二四二九、二四三〇、二四三一、二四三二、二四三三、二四三四、二四三五、二四三六、二四三七、二四三八、二四三九、二四四〇、二四四一、二四四二、二四四三、二四四四、二四四五、二四四六、二四四七、二四四八、二四四九、二四五〇、二四五一、二四五二、二四五三、二四五四、二四五五、二四五六、二四五七、二四五八、二四五九、二四六〇、二四六一、二四六二、二四六三、二四六四、二四六五、二四六六、二四六七、二四六八、二四六九、二四七〇、二四七一、二四七二、二四七三、二四七四、二四七五、二四七六、二四七七、二四七八、二四七九、二四八〇、二四八一、二四八二、二四八三、二四八四、二四八五、二四八六、二四八七、二四八八、二四八九、二四九〇、二四九一、二四九二、二四九三、二四九四、二四九五、二四九六、二四九七、二四九八、二四九九、二五〇〇、二五〇一、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、二五〇七、二五〇八、二五〇九、二五一〇、二五一一、二五一二、二五一三、二五一四、二五一五、二五一六、二五一七、二五一八、二五一九、二五二〇、二五二一、二五二二、二五二三、二五二四、二五二五、二五二六、二五二七、二五二八、二五二九、二五三〇、二五三一、二五三二、二五三三、二五三四、二五三五、二五三六、二五三七、二五三八、二五三九、二五四〇、二五四一、二五四二、二五四三、二五四四、二五四五、二五四六、二五四七、二五四八、二五四九、二五五〇、二五五一、二五五二、二五五三、二五五四、二五五五、二五五六、二五五七、二五五八、二五五九、二五六〇、二五六一、二五六二、二五六三、二五六四、二五六五、二五六六、二五六七、二五六八、二五六九、二五七〇、二五七一、二五七二、二五七三、二五七四、二五七五、二五七六、二五七七、二五七八、二五七九、二五八〇、二五八一、二五八二、二五八三、二五八四、二五八五、二五八六、二五八七、二五八八、二五八九、二五九〇、二五九一、二五九二、二五九三、二五九四、二五九五、二五九六、二五九七、二五九八、二五九九、二六〇〇、二六〇一、二六〇二、二六〇三、二六〇四、二六〇五、二六〇六、二六〇七、二六〇八、二六〇九、二六一〇、二六一一、二六一二、二六一三、二六一四、二六一五、二六一六、二六一七、二六一八、二六一九、二六二〇、二六二一、二六二二、二六二三、二六二四、二六二五、二六二六、二六二七、二六二八、二六二九、二六三〇、二六三一、二六三二、二六三三、二六三四、二六三五、二六三六、二六三七、二六三八、二六三九、二六四〇、二六四一、二六四二、二六四三、二六四四、二六四五、二六四六、二六四七、二六四八、二六四九、二六五〇、二六五一、二六五二、二六五三、二六五四、二六五五、二六五六、二六五七、二六五八、二六五九、二六六〇、二六六一、二六六二、二六六三、二六六四、二六六五、二六六六、二六六七、二六六八、二六六九、二六七〇、二六七一、二六七二、二六七三、二六七四、二六七五、二六七六、二六七七、二六七八、二六七九、二六八〇、二六八一、二六八二、二六八三、二六八四、二六八五、二六八六、二六八七、二六八八、二六八九、二六九〇、二六九一、二六九二、二六九三、二六九四、二六九五、二六九六、二六九七、二六九八、二六九九、二七〇〇、二七〇一、二七〇二、二七〇三、二七〇四、二七〇五、二七〇六、二七〇七、二七〇八、二七〇九、二七一〇、二七一一、二七一二、二七一三、二七一四、二七一五、二七一六、二七一七、二七一八、二七一九、二七二〇、二七二一、二七二二、二七二三、二七二四、二七二五、二七二六、二七二七、二七二八、二七二九、二七三〇、二七三一、二七三二、二七三三、二七三四、二七三五、二七三六、二七三七、二七三八、二七三九、二七四〇、二七四一、二七四二、二七四三、二七四四、二七四五、二七四六、二七四七、二七四八、二七四九、二七五〇、二七五一、二七五二、二七五三、二七五四、二七五五、二七五六、二七五七、二七五八、二七五九、二七六〇、二七六一、二七六二、二七六三、二七六四、二七六五、二七六六、二七六七、二七六八、二七六九、二七七〇、二七七一、二七七二、二七七三、二七七四、二七七五、二七七六、二七七七、二七七八、二七七九、二七八〇、二七八一、二七八二、二七八三、二七八四、二七八五、二七八六、二七八七、二七八八、二七八九、二七九〇、二七九一、二七九二、二七九三、二七九四、二七九五、二七九六、二七九七、二七九八、二七九九、二八〇〇、二八〇一、二八〇二、二八〇三、二八〇四、二八〇五、二八〇六、二八〇七、二八〇八、二八〇九、二八一〇、二八一一、二八一二、二八一三、二八一四、二八一五、二八一六、二八一七、二八一八、二八一九、二八二〇、二八二一、二八二二、二八二三、二八二四、二八二五、二八二六、二八二七、二八二八、二八二九、二八三〇、二八三一、二八三二、二八三三、二八三四、二八三五、二八三六、二八三七、二八三八、二八三九、二八四〇、二八四一、二八四二、二八四三、二八四四、二八四五、二八四六、二八四七、二八四八、二八四九、二八五〇、二八五一、二八五二、二八五三、二八五四、二八五五、二八五六、二八五七、二八五八、二八五九、二八六〇、二八六一、二八六二、二八六三、二八六四、二八六五、二八六六、二八六七、二八六八、二八六九、二八七〇、二八七一、二八七二、二八七三、二八七四、二八七五、二八七六、二八七七、二八七八、二八七九、二八八〇、二八八一、二八八二、二八八三、二八八四、二八八五、二八八六、二八八七、二八八八、二八八九、二八九〇、二八九一、二八九二、二八九三、二八九四、二八九五、二八九六、二八九七、二八九八、二八九九、二九〇〇、二九〇一、二九〇二、二九〇三、二九〇四、二九〇五、二九〇六、二九〇七、二九〇八、二九〇九、二九一〇、二九一一、二九一二、二九一三、二九一四、二九一五、二九一六、二九一七、二九一八、二九一九、二九二〇、二九二一、二九二二、二九二三、二九二四、二九二五、二九二六、二九二七、二九二八、二九二九、二九三〇、二九三一、二九三二、二九三三、二九三四、二九三五、二九三六、二九三七、二九三八、二九三九、二九四〇、二九四一、二九四二、二九四三、二九四四、二九四五、二九四六、二九四七、二九四八、二九四九、二九五〇、二九五一、二九五二、二九五三、二九五四、二九五五、二九五六、二九五七、二九五八、二九五九、二九六〇、二九六一、二九六二、二九六三、二九六四、二九六五、二九六六、二九六七、二九六八、二九六九、二九七〇、二九七一、二九七二、二九七三、二九七四、二九七五、二九七六、二九七七、二九七八、二九七九、二九八〇、二九八一、二九八二、二九八三、二九八四、二九八五、二九八六、二九八七、二九八八、二九八九、二九九〇、二九九一、二九九二、二九九三、二九九四、二九九五、二九九六、二九九七、二九九八、二九九九、三〇〇〇、三〇〇一、三〇〇二、三〇〇三、三〇〇四、三〇〇五、三〇〇六、三〇〇七、三〇〇八、三〇〇九、三〇一〇、三〇一一、三〇一二、三〇一三、三〇一四、三〇一五、三〇一六、三〇一七、三〇一八、三〇一九、三〇二〇、三〇二一、三〇二二、三〇二三、三〇二四、三〇二五、三〇二六、三〇二七、三〇二八、三〇二九、三〇三〇、三〇三一、三〇三二、三〇三三、三〇三四、三〇三五、三〇三六、三〇三七、三〇三八、三〇三九、三〇四〇、三〇四一、三〇四二、三〇四三、三〇四四、三〇四五、三〇四六、三〇四七、三〇四八、三〇四九、三〇五〇、三〇五一、三〇五二、三〇五三、三〇五四、三〇五五、三〇五六、三〇五七、三〇五八、三〇五九、三〇六〇、三〇六一、三〇六二、三〇六三、三〇六四、三〇六五、三〇六六、三〇六七、三〇六八、三〇六九、三〇七〇、三〇七一、三〇七二、三〇七三、三〇七四、三〇七五、三〇七六、三〇七七、三〇七八、三〇七九、三〇八〇、三〇八一、三〇八二、三〇八三、三〇八四、三〇八五、三〇八六、三〇八七、三〇八八、三〇八九、三〇九〇、三〇九一、三〇九二、三〇九三、三〇九四、三〇九五、三〇九六、三〇九七、三〇九八、三〇九九、三一〇〇、三一〇一、三一〇二、三一〇三、三一〇四、三一〇五、三一〇六、三一〇七、三一〇八、三一〇九、三一一〇、三一一一、三一一二、三一一三、三一一四、三一一五、三一一六、三一一七、三一一八、三一一九、三一二〇、三一二一、三一二二、三一二三、三一二四、三一二五、三一二六、三一二七、三一二八、三一二九、三一三〇、三一三一、三一三二、三一三三、三一三四、三一三五、三一三六、三一三七、三一三八、三一三九、三一四〇、三一四一、三一四二、三一四三、三一四四、三一四五、三一四六、三一四七、三一四八、三一四九、三一五〇、三一五一、三一五二、三一五三、三一五四、三一五五、三一五六、三一五七、三一五八、三一五九、三一六〇、三一六一、三一六二、三一六三、三一六四、三一六五、三一六六、三一六七、三一六八、三一六九、三一七〇、三一七一、三一七二、三一七三、三一七四、三一七五、三一七六、三一七七、三一